



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2014 : 年次記録 : 持続可能な開発のための教育
Issue Date	2017-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65290
Type	report
File Information	chapter-2.pdf,



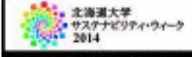
2. 開催行事のウェブサイト



行事内容

開催日時	2014年9月28日(日) 開場: 9:30 開始: 10:00 終了: 17:00 (終了しました)
主催者	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター
共催	法学研究科附属高等法政教育研究センター
会場	情報教育館 3 F (北区北17条西8丁目)
言語: 日本語 (通訳なし)	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 1964年9月、北京と東京に常駐する日中双方の記者がはじめて、両国の地を踏みました。それから半世紀の月日が経ちました。日本の記者の眼に建国からわずか15年しか経たない中華人民共和国はどのように映り、記者はいかに報じたのでしょうか。中国の記者は、東京五輪の開催に沸く日本をどのように眺め、その様子を本国にどのように伝えていたのでしょうか。本企画は、日本と中国のジャーナリストをお招きし、日中双方の報道の50年の歴史を振り返る試みです。ご承知の通り、2012年以降、日中間においては領土主権をめぐる問題で深刻な摩擦が生じております。メディアという側面から日中関係の半世紀を振り返り、これからの両国関係、さらには東アジアの未来への示唆を得たいと考えます。



北海道大学
サステナビリティ・ウィーク
2014

日本報道、 中国報道の半世紀

日中記者交換協定50年

9/28

北海道大学情報教育館3階
札幌市北区北17条西8丁目
10:00～17:00 (9:30開場)

**入場
無料**

1964年9月28日、北京と東京に常駐する日中双方の記者がはじめて両国の地を踏み、それから半世紀の月日が経ちました。本企画は、日中双方の報道の50年を振り返る試みです。1964年、第一期の記者として北京に赴いた大崎幸次氏(元東京放送)と、国交回復前に北京日報の特派員として日本に遷された王慶平氏にご講演をいただきます。メディアという側面から日中関係の半世紀を回顧し、これからの両国関係、さらには東アジアの未来への示唆を得たいと考えます。

プログラム

10:00～10:05 主催者挨拶

10:10～10:30 **1964年、日本メディアの中国報道**
講演者 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院教授
西 園 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院教授

10:30～10:50 **1964年、中国メディアの日本報道**
西 園 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院教授

10:50～11:10 **中国報道50年の変化**
高井聖司 桜美林大学リベラルアーツ学部教授 北海道大学名誉教授

11:10～11:25 **コメント**
加藤千洋 岡山大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授

13:00～14:30 **特別講演 大崎幸次 元東京放送北京特派員**
特別講演 王 慶 平 元北京日報東京特派員、元札幌新聞記者

14:45～17:00 **ディスカッション**
日中記者交換協定50年、日本報道、中国報道の半世紀

パネリスト
加藤千洋 岡山大学教授
高井聖司 桜美林大学教授
西 園 中 日本情報出版局長
藤野 彰 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

司会: 鈴木賢
北海道大学大学院法学研究科教授 (法学研究科制度高等法政教育研究センター・センター長)

主催: 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター
共催: 北海道大学法学研究科附属高等法政教育研究センター
共催: 岡山大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター 高井聖司
電話: 011-720-5233 Email: shohai@hokudai.ac.jp

会場はこちら



情報教育館 3 F (クリックで拡大)

北海道大学側の実施責任者	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター長 渡邊浩平
事前申し込み	必要 (こちらから)
参加費	無料
問い合わせ先	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター 渡邊浩平

実施報告

今から50年前の1964年、日本と中国の間に記者交換協定が締結され、日中双方の記者が互いの国に常駐するようになりました。この年には、東京オリンピックが開催され、その期間中に中国が初の原爆実験を行うなど、大きな出来事が重なった年でした。それから半世紀の月日が経ったいま、報道という視点から日本と中国の関係を振り返り、未来への示唆を得るために、本企画を行ないました。企画の実現に際しては、北海道大学法学研究科附属高等法政教育研究センターと同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の協力を得ました。なお、シンポジウムを開催した9月28日は、50年前、日本の記者が香港から中国に入国した日です。

シンポジウムでは午前、東アジアメディア研究センターの渡邊浩平教授が1964年の日本メディアの中国報道を、西茹准教授が同年の中国メディアの日本報道の分析を発表し、桜美林大学高井潔司教授（北海道大学名誉教授）より、「中国報道50年の変化」が報告されました。そして、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科加藤千洋教授から、渡邊教授、西准教授、高井教授による報告へのコメントがなされました。

午後の部では、1964年の第一期特派員として北京に赴任された東京放送の大越幸夫氏と国交回復前に北京日報記者として東京に滞在された王泰平氏による特別講演を行ないました。最後に、法学研究科附属高等法政教育研究センター長の鈴木賢教授の司会のもと、加藤教授、高井教授、さらに、日本僑報社編集長段躍中氏、メディア・コミュニケーション研究院藤野彰教授が加わり、ディスカッションを行ないました。

現在、日中関係は極めて悪く、首脳会談も行えない状態にあります。半世紀の日中双方の報道を当時の時代背景を振り返りつつ冷静に語る場を設けたことは、極めて意義のあることと考えます。なお、記者交換協定40年の際は、日中双方で記念行事が開かれましたが、50年にあたっては、この北海道大学のシンポジウム以外に現在のところ行われてはいないようです。シンポジウムの様子は、10月9日（木）22時からのNHKのBSニュース「国際報道2014」で紹介されました。



渡邊教授による発表の様子



ディスカッションの様子

CRC 国際シンポジウム 生体分子をモチーフとした機能性分子の創製と応用



行事内容

開催日時	2014年9月30日(火) 開場: 12:00 開講: 12:50 終了: 18:50 (終了しました)
主催者	北海道大学触媒化学研究センター
共催	日本化学会北海道支部、高分子学会北海道支部、有機合成化学協会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター
会場	創成科学研究棟 4F セミナー室 B, C
言語: 英語 (通訳なし)	対象: 専門家・大学生・院生
行事概要	生体分子は有機化学の中でも特に重要な研究対象化合物である。生命現象の理解、疾病・感染の克服を目的とした研究のみならず、生体分子を利用する有用分子・材料・システムの創出や、微量な生理活性物質の新しい検出法の開発など、多岐に渡る研究が盛んに行われている。今回、生体分子をキーワードとして各分野の6人のエキスパートを招聘し、研究異分野間の意見交換と、生体分子関連の研究開発における持続的な成長を目標とし、国際シンポジウムを開催する。

北海道大学触媒化学研究センター 国際シンポジウム
CRC International Symposium

生体分子をモチーフとした機能性分子・材料の創製と応用

Synthesis and Applications of Functional Molecules and Materials Utilizing Biomolecules as a Motif

Date: September 30, 2014 12:00-18:50
Venue: Gelatino Research Center, Hokkaido University, Japan
Seminar Room B and C (Seminar Building 4th Floor) Registration and Oral Presentations
Seminar Plaza (Seminar Building 2nd Floor) Poster Presentations and Banquet
Important Information (read later) July 19th (poster presentation only)
Contact: Yoshitaka Sugano (CRC, Hokkaido Univ.), Email: yosugano@chem.hokkaido-u.ac.jp
Tel: 011-706-9107

12:00 Registration Open
12:50 Opening Remark

12:55~13:35 **Prof. Wanpen Wachboonyakiat** (Chulalongkorn Univ., Thailand)
Invited Lecture
[Preparation of Antibacterial Surface Coatings for Wound Dressings]

13:35~14:15 **Prof. Takeshi Serizawa** (Tokyo Tech., Japan)
Invited Lecture
[Peptide Motifs for Polymer-Surface Engineering]

14:15~15:15 **Prof. Atsushi Fukuoka** (CRC, Hokkaido Univ., Japan)
Plenary Lecture
[Biomass Conversion by Heterogeneous Catalysts]

15:15~15:30 Coffee Break

15:30~16:10 **Prof. Martin James Lear** (Tokyo Tech., Japan)
Invited Lecture
[Total Synthesis and Biomimetic Studies of Nine-Membered Ene-diyneal]

16:10~16:50 **Prof. Kenji Monde** (Hokkaido Univ., Japan)
Invited Lecture
[Analysis and Applications of Chiral Biomolecules by Vibrational Circular Dichroism]

16:50~17:50 **Prof. Toshikazu Takata** (Tokyo Tech., Japan)
Plenary Lecture
[Macrocyclic Catalyst for Highly Efficient Hydroamination via Cavity-Threading of Substrate as The Key Process]

17:50~18:50 Poster Session
18:50~ Banquet

主催: 北海道大学 触媒化学研究センター
共催: 日本化学会北海道支部、高分子学会北海道支部、有機合成化学協会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター

北海道大学側の実施責任者	北海道大学触媒化学研究センター集合機能化学研究部門准教授 小山 靖人
事前申し込み	必要:メールにて7月31日まで(当日参加も可能ですが、できるだけ事前にお申し込みください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学触媒化学研究センター集合機能化学研究部門 Catalysis Research Center, Hokkaido University 小山 靖人 Yasuhito Koyama
URL	http://www.cat.hokudai.ac.jp

実施報告

研究分野の持続的な発展と、分野間の意見交換を目的に、生体分子をキーワードとして様々な分野の6人のエキスパートを世界から招き、国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは北海道大学触媒化学研究センターが主催し、4団体(日本化学会北海道支部、高分子学会北海道支部、有機合成化学協会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター)の共催支援により実現しました。

シンポジウムでは、口頭発表6件(招待講演4件、特別講演2件)と27件の学生によるポスター発表を行いました。招待講演者からは、「生体高分子を用いる機能性材料の創製」、「生体分子の分子認識機構の解明」、「生体分子からの有用物質創製」、「生理活性天然物の全合成」、「天然の微量成分の新しい構造決定法」、「生体分子をモチーフとした新しい触媒系の開発」という多岐に渡る分野の講演が行なわれ、生体分子をめぐる研究開発の未来を議論しました。

参加者は学生88名、教職員28名で、合計116名であり、予想を超える多数の学生の参加とともに成功裡に終了しました。イベント終了後に行ったアンケートでは、英語の授業を受けることができる貴重な体験だった、多分野の講演が刺激的だった、といった回答が多く見られました。



学生によるポスター発表の様子



口頭発表時の様子

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai



行事内容

開催日時	2014年10月8日(水) 開場:18:00 開始:18:30 終了:19:30 (終了しました)
主催者	北海道大学附属図書館/国連寄託図書館
共催	北大マルシェ
後援	独立行政法人国際協力機構北海道センター (JICA 北海道), 北海道(予定), 公益財団法人札幌国際プラザ, 日本国際連合協会北海道本部(予定)
会場	北海道大学附属図書館 本館 メディアコート(予定)
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生
行事概要	北大図書館は国連寄託図書館として、国連のミレニアム開発目標達成のために「立ち上がる」世界的なキャンペーン・STAND UP TAKE ACTION に参加します。2014年は国連が定める「国際家族農業年」であることから、北海道の農業・食料について学ぶイベント「北大マルシェ」の取り組みを取り上げ、「北大マルシェ」がめざすもの、「北大マルシェ」で学んだことなどを、農学研究院・小林国先生と学生さんから発表していただきます。図書館職員によるミレニアム開発目標を巡る状況についてもご紹介します。北海道の「食」や「農」、「サステナブルな未来」について一緒に考えてみませんか？

北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2014
Hokkaido University Sustainability Week 2014

あなたの参加が
世界を動かす力になります

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

AGAINST POVERTY AND FOR THE MILLENNIUM DEVELOPMENT GOALS

10/8 Wed. 18:30-19:30

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai × 北大マルシェ = ?

国連のミレニアム開発目標達成のために「**立ち上がる**」世界的なキャンペーンの北大版「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」。今年は、農産物生産者と消費者の交流を通して北海道の「食」や「農」を考えるイベント「**北大マルシェ**」を取り上げ、イベント関係者にお話を伺います。**サステナブルな未来**のために、あなたができること、一緒に考えてみませんか？

HOKUDAI MARCHE 2014

北海道大学附属図書館(本館)メディアコート
(札幌市北区北8条西5丁目)

※おからだの不自由な方をのぞき、お車での来館はご遠慮ください。
※会場内が寒い場合があります。暖かい服装でお越しください。

■対象: 北大生、一般の方 (入場無料・事前申込不要)
■お問い合わせ先:
TEL 011-706-2973 E-Mail ref@lib.hokudai.ac.jp
■Webサイト: <http://www.lib.hokudai.ac.jp/standup> (QRコード→)

主催: 北海道大学附属図書館/国連寄託図書館
共催: 北大マルシェ
後援: JICA北海道、北海道、公益財団法人札幌国際プラザ、日本国際連合協会北海道本部

会場はこちら



北海道大学側の実施責任者	附属図書館・利用支援課長 豊田裕昭
事前申し込み	不要 (直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学附属図書館/国連寄託図書館 城恭子 E-mail: ref[at]lib.hokudai.ac.jp
URL	http://www.lib.hokudai.ac.jp/standup/

実施報告

附属図書館は、10月8日(水) 午後6時30分から、本館メディアコートにおいて「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を開催しました。

「STAND UP TAKE ACTION」とは、国連の「ミレニアム開発目標」達成のために「立ち上がる」世界的なキャンペーンです。附属図書館は、道内で唯一の国連寄託図書館に指定されており、国連及び関係機関の資料の所蔵・提供のみならず、国連の広報活動にも貢献してきました。当イベントは、その広報活動の一環として行ったものです。

当日は学生、教職員、市民の方を合わせて36名の参加がありました。まず、イベントの冒頭に図書館職員が本イベントの背景や趣旨を説明しました。

続いて、農産物生産者と消費者の交流を通して北海道の「食」や「農」について考えるイベント「北大マルシェ」の関係者として、小林国之先生(北海道大学農学研究院)と若林諒さん(北海道大学農学院修士1年生)にご講演いただきました。

小林先生からは、北大マルシェを取りまとめる立場から、マルシェの意義や位置付けの講話、マルシェに参加している農産物生産者についてのエピソードの紹介がありました。

若林さんからは、北大マルシェ2014 実行委員長としての活動を通して学んだこと、北大生をはじめ多くの大学生を取りまとめることでやりがいを得たことの発表がありました。

最後に新田孝彦附属図書館長の「スタンド・アップ!」の掛け声のもと、参加者全員で立ち上がり、国連の「ミレニアム開発目標」達成に対する意志をアピールしました。

「STAND UP TAKE ACTION」の趣旨のひとつは、国際的な課題について身近なことから実践する点にあります。参加者に実施したアンケートの中には、「行動」や「経験」が重要であるとのこと意見があり、イベントの趣旨が参加者に浸透した様子が窺われました。



小林助教の発表



参加者全員でスタンド・アップ

専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育



行事内容

開催日時 2014年10月8日(水) 開場: 13:00 開講: 14:00 終了: 16:00 (終了しました)

主催者 次世代都市代謝教育研究センター

共催 国際水環境学院 (2iE), ザンビア大学 (UNZA) 水資源管理センター

会場 フロンティア科学研究棟 セミナールーム

言語: 英語 (通訳なし) **対象:** 専門家・大学生・院生

行事概要 2010年の国連によるMDGレポートによれば, 2008年現在で26億人の人が適切なトイレを持っておらず, 2015年にはその数が27億人に達するとされている. 特に, サブサハラのアフリカ地域と南アジアでは人口の69%, 64%の人が適切なトイレを持っていない. この中で, サニテーションに関わる人材育成が急務である. 本セミナーでは, サニテーション人材育成の国際ネットワーク形成活動の一環として, 人材育成コースの導入部に相当する, 現状の把握に関する講義をザンビアとインドネシアの都市スラムとブルキナファソの農村部の現状を例に試行的に実施し, 学生諸君のアンケートにより教育内容の向上を目指す.

[会場はこちら](#)



フロンティア科学研究棟 (クリックで拡大)

北海道大学側の実施責任者	船水 尚行
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院サニテーション工学研究室 船水 尚行 E-mail: funamizu[at]eng.hokudai.ac.jp ([at]を@に置き換えて送信してください)

実施報告

専門家の国際ネットワークを有効に利用してサニテーションに関する教育プログラムを作る取組の一環として開催しました。今年はサニテーションに関わる社会的・文化的な面をとりあげ、3人の講師に講演をお願いしました。また、ザンビア大学の教員と学生、2iE(ブルキナファソ)の教員と学生、インドネシア科学技術院の研究者を交えて、講演についての議論を行い、サニテーションに関する教育プログラムのカリキュラムやコンテンツについて意見交換を行いました。また、講演に参加した学生諸君からも講義の内容に関するコメントや、教育プログラムに対する意見等をもらいました。

今回は、サニテーションの政治学的側面、文化人類学的側面、ならびに経営学的側面に関する3つの講義のe-Learnig教材を作ることができました。また、各国の学生からの意見を聞くこともできました。

今後は、e-Learnig教材の充実に一層努力し、サニテーションの教育プログラムの完成を目指していきます。



参加者の集合写真



船水教授による講演の様子

CLARK THEATER 2014



行事内容

開催日時	2014年10月15日(水)～10月19日(日) (終了しました)
主催者	北大映画館プロジェクト
会場	クラーク会館
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	2006年よりスタートしましたCLARK THEATERも今年で9年目を迎えます。 今年も“映像・映画を通じたコミュニケーションの場の創造”を目指し、文化的に優れた映画を楽しむことのできる映画館を期間限定で開催します。 また2009年度より始まった、サステナビリティウィークへのCLARK THEATERの参加も今年で6年目となりました。そして参加後の来場者数の伸びにより、この4年間では延10,700人もの方々がCLARK THEATERに足を運んでいただきました。 持続可能な社会の構築のためには、異なる環境にいる人々が交流を持ち複数の分野から広く考える視点で議論しなければなりません。 私たちは映画館で「映画」を観るという共通の経験を介して、様々な人が持続可能な社会構築に向けた学びや交流をする機会を提供します。大学と学生と市民の方々がめぐり逢うことで、サステナビリティを促すコミュニケーションへと発展すると共に、大学内に映画館があることの意味や映像教育の実践という視点からも議論することにつながると思います。 このような考えのもとで、その実現に向け、長編プログラムや短編プログラム、企画プログラムなど多種多様な企画を取り揃えます。 今年もスタッフ一同皆様のご来場を心よりお待ちしております。

会場はこちら



北海道大学側の実施責任者	北大映画館プロジェクト実行委員長 川端宣志
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	一部有料(詳細は後日決定)
問い合わせ先	北大映画館プロジェクト mail: info[at]clarktheater.jp
URL	http://www.clarktheater.jp/

実施報告

北海道大学の施設であるクラーク会館の講堂・大集会室を使用し、学生や市民に開放した期間限定の映画館を運営しました。全期間を通じて全11プログラム、20作品を上映しました。シネマコンプレックスでは公開していない短編作品や、名作と言われる白黒映画など幅広いコンテンツを提供することが出来ました。様々なジャンルの作品を楽しんでいただくことで、商業映画館では提供することのない楽しさを実感していただきました。また監督をお招きしたトークショーをご覧いただくことで、制作現場の話や、制作者の思いを知っていただく機会を設けることが出来ました。北大カフェプロジェクトや、北海道大学映画研究会とも協力し、足を運んだお客様だけではなく、協力いただいた他団体の学生スタッフにも映像の世界に興味を持つ一助としての場を提供することができました。

今後も私たち映画館プロジェクトは映像文化を今以上に発展させるべく、北大での常設映画館の創設に向けて活動を続けていきます。その中で現代社会が内包する問題を様々な切り口で訴えていき、また教育機関としての大学に常設映画館が存在することの可能性を私たちの活動を通して訴えていければと思います。



第二会場の様子



トークショーの様子



メンバーの集合写真

食事はどのように楽しいの？



行事内容

開催日時	2014年 10月19日(日) 開場 : 9:00 開講 : 9:30 終了: 12:30 (終了しました)
主催者	歯学研究科
会場	歯学部講堂
言語:日本語・英語 (同時通訳)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	食事はとても楽しいもので、ただ料理を味わうだけでなく歯から得られる食感(堅さや弾力)や、咀嚼する神経と筋肉の相互作用、さらには食事中的談笑や審美性と、色々な要素が影響を与えます。本講演会はこれら「食事を楽しくする要素」について、世界的に有名な先生方をお招きして紹介することを目的として開催します。そしてみなさんの現在の食事をより楽しくする為の秘訣などについて討論し、より「健やかに生きる」ことに貢献したいと思います。
北海道大学側の実施責任者	歯学研究科 助教 有馬 太郎
事前申し込み	必要 (こちらから : 10月17日(金)まで)
参加費	無料
問い合わせ先	歯学研究科 Graduate School of Dental Medicine 有馬太郎 TARO ARIMA mail: tar[at]den.hokudai.ac.jp

実施報告

秋晴れの中、歯学部講堂にて「食事はどうして楽しいの?」は開催されました。

本会の趣旨は「食事」という、日常生活で欠かすことのできない活動について科学的知見をふまえて紹介することでした。

最初に本企画責任者の横山敦郎歯学部長より企画内容についての紹介が行われ、ついで「噛むことの重要性」について本学兼平孝 講師よりお話がありました。非常に平易な言葉で、親しみやすい雰囲気の中でお話いただき、聴衆も冗談に笑ったりしながら聞き入っていました。続いて「味覚とその機能」について、姉妹校であるオーフス大学よりお越し頂いた Peter Svensson 教授よりお話がありました。ワインや日本発祥の「うまみ」についてのお話を科学的な知見より紹介され、大変興味深いものでした。珈琲ブレイクを挟んで「唾液の働き」について、北海道歯科衛生士会 原田 晴子 理事がお話されました。原田先生は患者へお話されるように説明されましたので非常に分かりやすく、また人形を使いながら舌の運動法を実演され、聴衆者らも一緒に舌を動かして練習しました。ついでカロリンスカ研究所という、医学系大学世界第二位の教育機関より Mats Trulsson 学部長にお越し頂き、「歯根膜」という「咬んでいることを理解するセンサー」の働きを説明してくださいました。本講演は世界でもめったに聞くことのできない内容で、特に専門家にとって貴重な内容でした。最後に本学の上田 康夫 講師より CAD/CAM (コンピュータが歯のデザインをアシスタントしてくれ、コンピュータにコントロールされたドリルで歯を彫刻する手法) による歯のかぶせ作製法の紹介がありました。これは審美性が非常に高く、かつ今年より保険が適用された治療法なので非常にタイムリーな内容でした。

すべての講演終了後、質疑応答の場が設けられ、ここで活発な意見交換がなされました。特に興味深かったのは農学部の外国人留学生からの質問で、固形物でも味覚を感じることがあるのか、というものでした。学部を超え、かつ食物を作る側の農学部学生からの興味でありましたので、Peter Svensson 先生も Mats Trulsson 先生も「こういう研究者を捕まえて一緒に研究して行くべきだね」と本行事後に振り返っていました。



会場の様子



原田理事の講演の様子

学術成果のオープンアクセスと HUSCAP



行事内容

開催日時 2014年10月20日(月)～2014年11月3日(月・祝) 平日9:00-22:00 土日:9:00-19:00
(図書館本館の開館時間に準じます) **(終了しました)**

主催者 北海道大学附属図書館

会場 北海道大学附属図書館 正面玄関ホール

言語:日本語 **対象:**専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 持続可能な社会を実現するためには、そのために必要となるさまざまな学術成果を広く世界で共有することが重要です。HUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)では、本学の学術成果を電子的に保存するとともに、ウェブ上で本文を無料公開してその可視性を高めることを目指しています。今回の展示では、学術成果を誰もが読めるようにしよう、というオープンアクセス運動のご案内とともに、現在HUSCAPで公開されている北大の学術成果をご紹介します。

[会場はこちら](#)



北海道大学側の実施責任者 附属図書館学術システム課 片桐 和子

事前申し込み 不要(直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

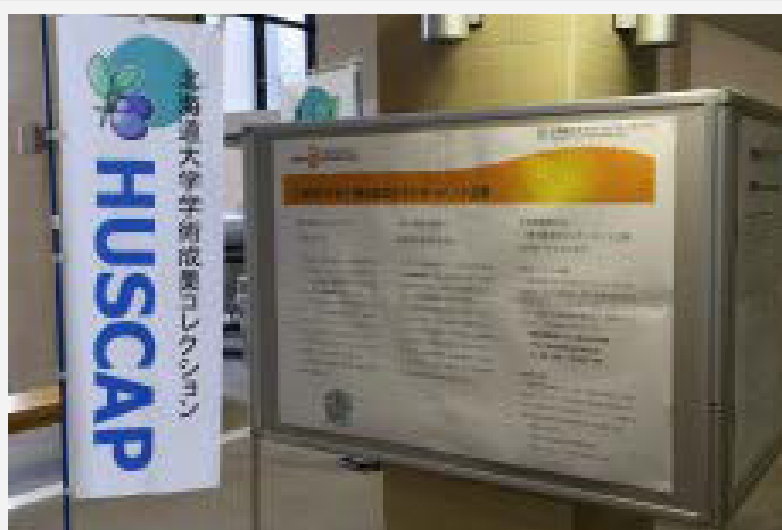
問い合わせ先 北海道大学 附属図書館学術システム課

URL <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp>

実施報告

持続可能な開発の為の教育に向けて、学術成果を世界の人々と共有することができるオープンアクセスとHUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)についてのポスター展示を開催しました。展示では「未来をつくる知の共有」をテーマに、研究者へのインタビューの他、HUSCAPによる博士論文のインターネット公表など、北大における学術成果のオープンアクセスの状況について紹介しました。HUSCAPで公開されている多様な学術成果と、教育研究成果を誰もが読むことができるオープンアクセスの意義を、図書館を訪れる学内外の方々へご案内することができました。

附属図書館では今後も学術成果のオープンアクセスと、それを実現するHUSCAPについての理解を深める取り組みを進めていきます。



展示風景_1



展示風景_2

第5回ESD 国際シンポジウム 次世代のESD 戦略



行事内容

開催日時 2014年10月25日(土) 開場:12:30 開講:13:00 終了:18:30 (終了しました)

主催者 北海道大学

会場 学術交流会館 (全体会のみ Ustream により配信)

言語: 日本語・英語 (同時通訳)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 ESD国際シンポジウム特設サイトは [こちら](#) です



世界の課題解決に取り組む北海道大学は、国連の「持続可能な開発のための教育の10年(DESDE)」に呼応して2005年から、持続可能性について考え、行動するための教育(ESD)をカリキュラムの中に取り込んできました。中でも、教育学研究科は、日中韓タイの大学と協働で「ESDキャンパス・アジア」プログラムを展開してきました。

国連DESDEが最終年を迎えるにあたり、5回目となる「ESD国際シンポジウム」を拡大して開催します。

大学生／大学院生、研究者、高等学校や市民団体の関係者が集まり、高等教育、高校教育、市民教育の連携による北海道とアジアの次世代ESDについて議論します。

講演者紹介

基調講演	主講演者1	主講演者2
ESD10年の総括	ESDの将来展望	ESDの再構築
 マリオ タブカノン Mario T. Tabucanon 国際連合大学逸仙研究所 客員教授	 楊 麗霞 Yang Jing Hahn 高麗大学校 副学長	 河川 明人 Akiko Kawaguchi 北海道大学教育学研究科 教授

参加登録は電話もしくはウェブサイトにて受け付けています。

【電話】教育学研究科:TEL 011-706-3965 / サステナビリティ・ウィーク事務局:TEL 011-706-8031

【ウェブサイト】<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/2014/esd>

[フライヤー\(PDF\)をダウンロード](#)

世界の課題解決に取り組む北海道大学は、国連の「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」に呼応して2005年から、持続可能性について考え、行動するための教育（ESD）をカリキュラムの中に取り込んできました。中でも、教育学研究科は、日中韓タイの大学と協働で「ESDキャンパス・アジア」プログラムを展開してきました。

国連DESDが最終年を迎えるにあたり、5回目となる「ESD 国際シンポジウム」を拡大して開催します。

大学生／大学院生、研究者、高等学校や市民団体の関係者が集まり、高等教育、高校教育、市民教育の連携による北海道とアジアの次世代 ESD について議論します。

講演者



基調講演

ESD10年の総括

マリオ タブカノン

Mario T. Tabucanon

国際連合大学高等研究所 客員教授



主題講演 1

ESDの将来展望

韓 龍震

Yong Jing Hahn

高麗大学校師範大学長



主題講演 2

ESDの再構築

河口 明人

Akito Kawaguchi

北海道大学教育学研究院 教授

プログラム		
13:00- 会場:大講堂	開催挨拶	上田 一郎 (北海道大学 副学長理事/SW実行委員長)
	開催趣旨 説明	小内 透 (北海道大学 教育学研究院長)
	基調講演	マリオ タブカノン (国際連合大学高等研究所 客員教授)
	主題講演 1	韓 龍震 (高麗大学校師範大学長)
	主題講演 2	河口 明人 (北海道大学教育学研究院 教授)
16:00-	分科会	
	分科会 1 ESD Campus Asia の 成果と展望	分科会 2 北海道UNESCOスクール・ コロキウム
	分科会 3 ESD 学生フォーラム	分科会 4 大学と地域社会が 協力するESD
18:00-18:30 会場:大講堂	総合討論	

※会場の都合上、事前にWEB予約された方を優先いたします。

会場はこちら



北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院教育学研究院 教授 水野 眞佐夫

事前申し込み [こちらから](#)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 教育学研究院
E-mail: shomu[at]edu.hokudai.ac.jp

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp
([at]を @ に置き換えて送信してください)

実施報告

国連の「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」が最終年を迎えるにあたり、サステナビリティ・ウィークではその全体テーマとして「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development, ESD）」を掲げました。その特別行事として「第5回 ESDシンポジウム 次世代のESD戦略」を開催しました。シンポジウムの全体会はインターネットにて世界生配信され、参加者数は165名（学内49名、学外48名、オンライン参加68名）であり、専門的な内容が少なくない中で、多くの参加を得ることができました。

本シンポジウムは教育学研究院によって過去4回にわたり開催されてきた「ESD国際シンポジウム」を拡大して開催したものです。開催の目的は、北海道・アジアにおけるESD推進の10年間を総括し、次代の教育の在り方について展望を得ることです。そのために、日中韓タイの海外協定校教員、道内ユネスコスクールの教員・研究者、環境省機関、また学生による分科会の開催など、北海道とアジアの次世代ESDについて多角的かつ総合的な情報提供と議論を行なう場を設けました。さらに基調講演者としてお招きした国際連合大学高等研究所（UNU-IAS）マリオ・タブカノン客員教授は、DESDに呼応する形で作られたUNU-IASにおいて指導的立場におられるESD研究者であり、国際的なESD情勢についても熟知される、世界的な第一人者です。ESDについて、規模・内容ともに非常に充実したシンポジウムとなりました。

シンポジウムは上田一郎理事・副学長による開催挨拶、教育学研究院小内透院長による趣旨説明によって開始されました。全体会では、UNU-IAS マリオ・タブカノン客員教授から「ESD10年の総括」、高麗大学校師範大学韓龍震学長から「ESDの将来展望」、本学教育学研究院 河口明人教授から「ESDの再構築」と題した講演が行なわれました。

分科会「ESD Campus Asiaの成果と展望」では日中韓タイの各大学と共に過去4年間取り組んできたESD国際協働教育について、参加大学による報告と今後の展望について討議しました。

分科会「北海道ユネスコ・スクールコロキウム」では、北海道におけるESD実践を中核的に担ってきたユネスコスクール活動について報告が行なわれ、ポストDESDの展望について議論を行いました。

分科会「ESD学生フォーラム」では、ESDの取組みに参加してきた学生によるプレゼンテーションとディスカッションが行なわれ、会場からの質問を含む活発な議論となりました。

分科会「大学と地域社会が協力するESD」では2つの報告とパネルディスカッションによって、RCE（Regional Centre of Expertise on ESD: ESD推進の地域拠点のこと）の設立など、大学を含めた地域社会全体としてのESD推進のための必要策が討議されました。

最後には再び大講堂に全参加者が集まり、総括セッションとして各分科会の代表者が登壇し、それぞれが行った議論について報告しました。

シンポジウム終了後に実施したアンケートでは、「様々な角度からESDについて知れたことが良かった」「国際的な視野を持つことの重要さがわかった」「北海道のRCE設立の動向が興味深かった」との回答が多くみられました。開会から閉会まで通しての参加をいただいた参加者も多く、全体で議論への認識を深めていけたことに、関係者一同、大きな満足感を得ました。様々な立場でESDの発展に携わる参加者が一堂に会し今後の展望を議論できた、大変貴重な機会となりました。（文責：国際本部サステナビリティ・ウィーク事務局）



基調講演後の質疑応答の様子



総括セッションの様子



参加者集合写真

障害をもつ大学生の就労をめざして



行事内容

開催日時	2014年10月26日(日) 開場: 10:00 開講: 10:30 終了: 12:00 ※終了後、15:00まで分科会を予定(別途申込) (終了しました)
主催者	北海道大学 特別修学支援室
後援	札幌学院大学
会場	学術交流会館 小講堂
言語:	日本語(手話通訳、要約筆記あり)
対象:	専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 わが国も、2014年2月19日をもって障害者権利条約への批准が叶い、効力を持つ時代となった。教育の場において、働く場において、障害者も健常者もともに活動する環境の提供が求められるようになったのである。そこで、このような法の整備がされていない時期から、障害者があたりまえに大学で学び、社会で働いていく道を拓いてきた先達に、その体験を聴く企画を立ち上げたい。さらに、就労支援に携わる職員の立場から、そして障害者雇用を積極的に受け入れている雇用の立場から、その実際を聴き、学ぶこと、働くことへの希望を紡ぎだす企画とする。

シンポジスト紹介

登り口 倫子氏 (DPI北海道ブロック会議 理事)

福島 太郎 氏 (公益社団法人 札幌聴覚障害者協会 理事)

片岡 聡 氏 (NPO法人リトルプロフェッサーズ理事長 / NPO法人東京都自閉症協会当事者スタッフ)

上村 差知 氏 (NPO法人コミュネット楽創 就業・生活相談室からびな室長)

藤枝 幸子 氏 (生活協同組合コープさっぽろ人事部 人事部 人事マネージャー)

シンポジウム分科会ポスター

北海道大学特別修学支援室主催シンポジウム企画

障害をもつ大学生の 就労をめざして

2014年10月26日(日)

北海道大学 学術交流会館

第1部 シンポジウム | 10:30 - 12:00 (開場 10:00)

障害をもつ社会人シンポジスト3名(肢体不自由、聴覚障害、発達障害)からは、大学生活や就労の経験をご講演いただきます。就労支援事業所の方、障害者雇用を行っている企業の方からは、障害者の就労を応援する例としてどのようなことを実践されてきたのかをご講演いただきます。

*シンポジウムの詳細はこちらへ <http://sustain.ola.hokudai.ac.jp/sow/p/2014/ud/>



第2部 分科会 (※要予約) | 13:00 - 15:00

4つの分科会があります。障害をもつ大学生を中心とした3つの分科会(肢体不自由、聴覚障害、発達障害)では、学生と障害をもつ社会人が修学や就労の経験に関する情報・意見交換を行います。教職員を中心とした分科会では、大学教職員、就労支援関係者、障害者雇用を積極的に行っている企業関係者で障害学生支援や社会資源に関する情報・意見交換を行います。

*シンポジウムおよび聴覚障害分科会には、要約筆記と手話通訳による情報保障を行います。他の分科会も、お申し込み内容に応じ情報保障をご希望いたします。



主催 北海道大学特別修学支援室
後援 札幌学院大学

概要

わが国も、2014年2月19日をもって障害者権利条約への批准が叶いました。教育の場において、働く場において、障害者も健常者とともに活動する環境の提供が求められるようになりました。そこで、このような法の整備がされていない時期から、障害者があたりまえに大学で学び、社会で働く道を拓いてきた先輩からその体験を聞く機会を設けました。さらに、就労支援に携わる職員の立場から、そして障害者雇用を積極的に受け入れている事業主の立場から、その実態を伝えていただきます。今回のシンポジウムが、参加者ひとりひとりにとって、学び働くことへの希望を紡ぎだす場となることを期待しています。

企画実施責任者 松田 康子
北海道大学教育学研究科 准教授
特別修学支援室相談員 (兼任)

参加申し込み方法

第1部 シンポジウム | 申し込みは不要です。情報保障が必要な場合は、下記問い合わせ先までご相談ください。

第2部 分科会 | 申し込みが必要です。

氏名・所属・連絡先(電話番号またはメールアドレス)・参加希望分科会(肢体不自由、聴覚障害、発達障害、教職員)・必要な情報保障を明記した上で、下記の分科会申し込み専用メールアドレスまでお申し込みください。
分科会申し込み締め切りは、2014年10月6日(月)です。

*会場収容人数の関係で、申し込み締め切り日前に締め切る場合もあります。

*申し込み時の個人情報は、本企画の運営及び進行を行う目的のみに使用させていただきます。

本企画問い合わせ先

北海道大学 特別修学支援室
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
高等教育推進機構1階 N144,N145
電話/FAX 011-706-7473
Email
企画全般: ud@jmu.hokudai.ac.jp
(※申込用紙・アンケート・その他)
分科会申し込み専用:
shuro1026@jmu.hokudai.ac.jp

(※申込用紙・アンケート・その他・印刷・写真・その他)



会場：北海道大学学術交流会館



北海道大学側の実施責任者 教育学研究院 准教授 松田 康子

事前申し込み 不要 (情報保障が必要な方は、事前にご連絡ください)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 特別修学支援室
 mail: udl[at]jimu.hokudai.ac.jp
 ([at]を@に置き換えて送信してください。)

実施報告

5名のシンポジストを招いて、特別修学支援室主催シンポジウム「障害をもつ大学生の就労をめざして」を開催しました。

肢体不自由のあるシンポジスト、ろうのシンポジスト、自閉症をもつシンポジストからは、大学で学び社会で働く経験を語っていただきました。就労支援事業所のシンポジストからは地域の社会資源について、ご発表いただきました。障害をもつ人を積極的に雇用している企業のシンポジストからは、企業での支援体制を中心にお話していただきました。参加者は約160名でした。アンケートの集計（回収率60%）によると、参加内訳は学生が30%を占め、次いで教育関係者とその他（福祉関係者等）がそれぞれ21.7%、市民14.1%となりました。参加者からは「当事者の話を聴くことができ勉強になった。」「今後も続けて欲しい。」「他の障害への理解を深めたいので、次の企画に期待する。」等の感想がありました。

特別修学支援室は、障害のある学生に対して合理的配慮に基づいた学びの環境整備を行う組織です。平成28年度より障害者差別解消法施行が決定している中、本シンポジウムにおいて「働く」という普遍的なテーマを共有できたことは非常に意義深いものでした。



講演の様子

北大×JICA 連携企画 青年海外協力隊トークイベント
～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～



行事内容

開催日時	2014年10月28日(火) 開場: 18:00 開講: 18:15 終了: 19:30 (終了しました)
主催者	独立行政法人 国際協力機構 北海道国際センター(札幌)
共催	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部 大会議室
言語: 日本語	対象: 一般市民・大学生・院生

行事概要



(上) アフリカのマラウイ共和国にて、約500人の子ども達を前にサイエンスショーを公演している様子。

青年海外協力隊として開発途上国の教育現場に携わってきた JICA ボランティアが、自分の目で見て、耳で聞いた2年間についてお話しします。また、その経験を今後どのように日本の教育・社会に還元できるのか、国際理解教育の視点からみなさんと考えます。協力隊に興味のある方、教員を目指している方、ぜひご参加ください!

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部 国際連携課 国際協力マネージャー 榎本宏
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	JICA 北海道(札幌) 市民参加協力課

実施報告

本イベントは、JICA 青年海外協力隊経験者による体験談と、教育関係者による「持続可能な開発のための教育」をテーマとしたパネルトークという2部構成で行いました。

前半の体験談は北大 OGで、青年海外協力隊としてアフリカのマラウイ共和国で理数科教師として現地の中高等学校で活動された、新江梨佳氏にお話しいただきました。

同国は水道普及率8%、電気普及率9%、平均寿命 47歳という国である反面、そこで新氏が見た物はアフリカのステレオタイプとなっている「貧しさ・悲惨さ・苦しみ」ではなく、現地の人々の「笑顔・エネルギー・可能性」だったと言います。新氏は、普段の授業に加え、サイエンスクラブの設立、マラウイ国の科学コンテストへの参加、同僚教員の授業・研修のサポートを通し、生徒や子どもたちが可能性を伸ばせる機会を作ること、同僚の先生が力を活かせる場をつくることを目標に活動しました。「自分たちでできる!」と目覚めた生徒の中には、卒業後、自分の村で風力発電を作る人も出たそうです。

後半のパネルトークには、新氏に加え北広島市西部中学校の渡邊圭教諭をお招きし、「これからの教育」と「海外の経験をそこにどう生かすことができるか」についてお話しいただきました。お2人がこれからの教育に必要なこととして共に言及されたのは「受け身からの脱却」と「周囲の人と積極的に関わっていく力」を育てていくことでした。そのための具体的な方法として、地域に目を向け、地域の課題を大人と共に考え行動できるような教育という提案がありました。

アンケートでは「日本で過ごしていて、日本の常識は世界の常識だと思っていましたが、今回のお話で視野を広げることができました」「今の日本は何もなくとも生きていける時代です。途上国は不便ですが、逆に生きる方法を考える人間になる気がしました」「本当の内なる力を引き出すにはどんな教育が必要なのか考えさせられます」などのコメントが寄せられ、これからの教育について考える機会を提供できたと感じました。

今回は講義形式で終わってしまいましたが、次回は参加者と自由に意見を交換できる参加型のイベントにできるように工夫を凝らしたいと思います。



現地で行った実験を披露する
新氏



マラウイでの経験を伝える新氏

時計台サロン 農学部に聞いてみよう ～北海道の絶滅危惧種を保護する試み～



行事内容

開催日時	2014年10月29日(水) 開場: 17:30 開講: 18:00 終了: 20:00 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院農学研究院
共催	北海道新聞社
後援	札幌国際プラザ、札幌農学同窓会
会場	札幌市時計台
言語: 日本語 (通訳なし)	対象: 一般市民・大学生・院生

行事概要

「時計台サロン」は、市民の皆さんに北大農学部などの研究を広く知っていただくと同時に、一緒に考え討論する場として平成24年4月から始まった市民公開セミナーです。本サロンは、北海道新聞社との共催、札幌国際プラザおよび札幌同窓会の後援の下で企画、運営されています。

毎回の講演は、旧札幌農学校演武場の雰囲気の色濃く残した二階にあるホールで行われており、現在までに20回開催されました。

今回は北海道内の固有動植物数が減少し、絶滅危惧種となっている現状と保護の取り組みに関する話題を取り上げます。

第22回
時計台サロン
農学部に聞いてみよう
平成26年度

入場無料
申し込み不要

北海道の
絶滅危惧種を
守るために

絶滅危惧から回復途上の
シマフクロウ
早矢仕 有子 (札幌大学 教授)

レブンアツモリソウの
自生地復元に関わる試み
志村 華子 (北海道大学農学研究院 助教)

日時 **10月29日(水)**
18:00～20:30 (開場 17:30)

会場 **札幌市時計台ホール (時計台2F)**
〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目
TEL: 011-231-0838

お問い合わせ 北海道大学農学事務局庶務担当 TEL: 011-706-2420
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

主催 | 北海道大学大学院農学研究院
共催 | 北海道新聞社 後援 | 札幌国際プラザ、一般社団法人札幌農学同窓会

あつもん
(レブンアツモリソウのゆるキャラ)

1878

北海道大学側の実施責任者	農学研究院 家畜生産学分野 家畜改良増殖学研究室 教授 高橋 昌志
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学農学事務部 庶務担当
URL	http://www.agr.hokudai.ac.jp/

実施報告

「時計台サロン」は、市民の皆さんに北大農学部などの研究を広く知っていただくと同時に、一緒に考え討論する場として平成24年4月から始まった市民公開セミナーです。

毎回の講演は、旧札幌農学校演武場の雰囲気の色濃く残した二階にあるホールで行われており、平成24年度は毎月開催の12回、平成25年度になってからは各月開催になり、26年度の現在までに21回開催されました。

このたび22回目となる本セミナーは「北海道の絶滅危惧種を守るために」をテーマに開催されました。講演では、北海道に生息する固有種であるシマフクロウや礼文島にしか生育しないレブンアツモリソウについての個体数の減少の現状と保護のための調査研究についての話題がそれぞれ札幌大学の早矢仕有子教授、北海道大学農学研究院の志村華子から提供されました。

参加者は市民の方々、本学のOBや学生の計72名であり、終了後に実施したアンケートでは、「アマチュアの動物写真愛好家や自然愛好家の増加によるシマフクロウの巣への無思慮な接近や、植物愛好家による盗掘など、人による状況悪化の程度の大きさが実感できた」などの回答が多くみられました。

時計台サロン実行委員会では、農学部から市民への情報発信の場として引き続き時計台サロンを開催していく予定です。



早矢仕教授による発表の様子



志村助教による発表の様子

北海道／防災・減災リレーシンポジウム ―冬の防災・危機管理を考える―



行事内容

開催日時 2014年10月30日(木) 開場:13:00 開講:13:30 終了:17:00 (終了しました)

主催者 北海道大学公共政策大学院(協力/大学院附属公共政策学研究センター)

共催 一般社団法人国立大学協会、北海道新聞社

会場 学術交流会館 講堂

言語:日本語(通訳なし) **対象:**専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 冬の北海道では、暴風雪による交通障害のほか、地震・津波や火山災害等の被害拡大も懸念されます。住民の暮らしや経済活動の安全を確保するため、大学・行政・マスコミが連携し、地域の特性に合った防災・減災対策と市民教育を進めることが欠かせません。本企画は、北見・室蘭とのリレー方式のシンポジウムにより、総合的な討論を行います。

また、10月28日(火)～10月30日(木)には、学術交流会館1Fホールにて、災害対応に関するポスター展(入場無料)も開催します。ぜひお立ち寄りください。

★当日は、多数のご来場をいただき、ありがとうございました。

このシンポジウムの報告を、下記URLにて紹介しておりますので、どうぞご参照ください。

会場はこちら



学術交流会館(クリックで拡大)

北海道大学側の実施責任者	北海道大学公共政策大学院 特任教授 高松 泰
事前申し込み	要(こちらから)10月27日(月)までに申し込みをしてください。 会場定員300名。(座席に余裕がある場合には、当日ご入場もお受けいたします)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 公共政策大学院 院長室 E-mail:office@hops.hokudai.ac.jp
URL	http://www.hops.hokudai.ac.jp/research/sustain.html

実施報告

10月30日(木)13時30分より、学術交流会館講堂にて「北海道／防災・減災リレーシンポジウム—冬の防災・危機管理を考える—プログラムC(札幌会場)」を開催しました。このシンポジウムは、「防災・日本再生シンポジウム」行事の一環として国立大学協会の助成を得て企画したもので、北見工業大学(10月17日)、室蘭工業大学(10月23日)での会議に続く、包括的な議論の場となりました。

シンポジウム前半では、本学理学研究院教授・谷岡勇市郎、工学研究院教授・岡田成幸、前気象庁長官の羽鳥光彦の三氏が基調講演を行いました。北海道において注意すべき地震発生のメカニズムや、積雪寒冷な気候に配慮した住宅が防災の面でも優れた特性を持っていること、また近年の地球温暖化・異常気象の傾向を受け、気象庁が取り組んでいる防災気象情報発信の改善・活用等について、各分野最前線の専門的知見が報告されました。

後半は、農学研究院・南哲行特任教授、北海道開発局事業振興部・高橋公浩部長、北海道総務部・加藤聡危機管理監、札幌市危機管理対策室・相原室長にも加わっていただき、パネルディスカッションを行いました。異常気象時における情報提供や避難勧告発令のあり方や「帰宅困難者対策」などについての行政面からの話題提供と、それに基づくディスカッションにつづき、会場からの発言も得て、地域住民の意識向上や北海道の防災教育に関する優れた取組みが紹介されました。

リレーシンポジウム全体では、基調講演8件、延べ時間10時間を越えるボリュームとなり、産業界・自治体関係者、一般市民の方々等、500人以上の方に参加いただくことができました。ご協力くださった関係諸機関の皆様にお礼を申し上げますとともに、参加者からいただいた意見や要望を参考に、今後も継続した取組みとして行えるよう努めてまいります。



パネルディスカッションにおける意見交換



パネルディスカッション全景

市民公開シンポジウム 都市でも農的生活 ―植物の面白さと豊かな生活―



行事内容

開催日時 2014年10月31日(金) 開場: 12:00 開講: 13:00 終了: 16:00 (終了しました)

主催者 北方生物圏フィールド科学センター

共催 北海道園芸研究談話会

会場 学術交流会館 小講堂

言語: 日本語 (逐次通訳あり)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 日常的に「競争」を感じる現代社会において、植物栽培や家庭菜園は生活に潤いを与えるもので、さらに一歩進んで都市圏においても農的生活の志向は増大している。このような状況を背景に、植物のもつ面白さ、今回は植物同士が化学物質により相互の生育を制御している現象を解説してもらう。札幌(近郊)や海外都市での市民農園や農的テーマパークを紹介する。さらに、道内各地での農業6次化のユニークな事例を紹介し、都市圏でも農業や農的生活への市民参加の道について議論する。

講演予定者は以下である。

植物同士で成長を制御するしくみ(藤井義晴教授・東京農工大学)

上海氏における農的テーマパーク(ザン・ユーピン助教・中国江西省花野菜研究所)

(北海道6次会会長)(札幌市経済局農政部)



会場はこちら



北海道大学側の実施責任者 荒木 肇

事前申し込み 不要 (直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

実施報告

2014年10月31日に学術交流会館で、北方生物圏フィールド科学センターと北海道園芸研究談話会との共催で開催され、111名が参加しました。このシンポジウムでは近年、札幌市内での市民農園の希望者の増加や学生農業サークル活動の活発化を背景に、潤いのある生活のために、都市における農的生活の状況や将来について、学術性や国際性も織り込んだ話題提供をベースに討論を行ないました。

講師の話題概要は以下です。

- ① 東京農工大学 藤井義晴教授は「植物同士で成長を制御するしくみ」について話され、化学物質が植物相互の生育を阻害または促進させているアレロパシーという現象を紹介しました。この関係を上手に活用すると雑草抑制になり、有機農業や農作業効率化や新規生物農薬の創出につながると説明されました。
- ② 中国江西省花野菜研究所 ザン・ユーピン助教は、「中国上海市における農業テーマパーク」について説明され、そこでは植物工場、バイオテクノロジーや近代庭園等による中国における農業発展と将来像を展示し、毎年30万人が見学に来てしていると報告されました。
- ③ さとみらいプロジェクトグループ 奥山 誠副施設長は「サッポロさとらんどにおける農的生活の支援活動」と題して、サッポロさとらんどが「人と農業・自然とのふれあい」や「都市と農業の共存」をテーマに、市民が農業や自然を身近に感じながら憩い・楽しむことが出来る魅力的な緑地空間の提供を理念に運営されており、1995年のオープン以降来年者は1,000万を超えたと報告しました。園内で農業体験の場を提供し、市民農園も194区画設置したものの、4倍競争率となり、農業のある暮らしに関心が高まっていると説明しました。
- ④ さっぽろ農学校吉岡宏直主任講師は「定年後にめざす農業活動」として、農業へ一歩進みたい人を対象にさっぽろ農学校が開講され、4月～11月上旬までの毎土曜日に農業実習（栽培技術の実践）と講義（農業全般基礎知識）が取りこまれて、50才代の受講生が多いと報告しました。また、さっぽろ農学校の卒業生がさっぽろ農学校倶楽部やグリーンライフサッポロのNPOを設立して、そこには北大生も参画している事例も報告されました。

討論では、多様な農業へのふれあいについて意見が出され、講師の吉岡氏から札幌市の「いきいきファーマー育成支援事業」が平成26年度から始まり、中高年世代が農業技術を習得し、農的活動を通じて生きがいのある暮らしを实践できるために研修ほ場を設置する計画（1人が約10aを耕作）も披露されました。北海道園芸研究談話会の支援に感謝します。



質疑応答時の様子



会場の様子

留学希望者向けセミナー SD on Campus



行事内容

開催日時	2014年10月31日(金) 開場:17:40 開講:18:10 終了:20:10 (終了しました)
主催者	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部
言語:英語(通訳なし)	対象:大学生・院生
行事概要	本企画は、協定大学においてサステナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP) で交換留学している留学生等に依頼し、学生の目線での情報提供を行ってもらう。
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 教授 瀬名波 栄潤
事前申し込み	必要(申込サイトにて)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際本部国際教務課 Division of International Academic Programs, Office of International Affairs 河野 公美 Kumi KONO Mail: jryugaku@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

国際本部は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、フィリピン・デラサル大学、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校 International University、中国・西安交通大学、オーストラリア・シドニー大学の5大学でした。2013年から、学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP) で交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。

本イベントは本年度で6度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「協定大学への留学について興味を持てた」、「北大生の活動も協定大学の取組にならって盛んになれば良い」などの回答がみられました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



国際本部からの説明



参加者の発表風景

第9回応用倫理国際会議

「安全、サステナビリティ、人性の涵養～気候変動に対する道德義務～」



行事内容

開催日時	11/1 (10:00～17:00), 11/2 (10:00～12:30) (終了しました)
主催者	北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター
会場	人文・社会科学研究教育棟 W409 室
言語:英語(通訳なし)	対象:専門家・大学生・院生
行事概要	本行事は、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士による、第9回応用倫理国際会議(2014年10月30日～11月2日)での基調講演とその前日(2014年10月30日)の特別講演会を開催することにある。今回の会議のテーマは「安全、サステナビリティ、人性の涵養」であり、特に気候変動に対する私たち市民の道德義務を倫理的に問うという内容となっており、まさにサステナビリティウィークの行事としてふさわしいものである。ジェイミソン博士は環境倫理における世界的な権威であり、サステナビリティの倫理についての研究の第一人者である。第9回応用倫理国際会議では「気候変動に対する道德義務」というタイトルで基調講演を行う。主に学術的な内容になるが、必ずしも予備知識を必要とするものではない。 受付開始: 11/1 9:30～11/2 9:30～
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 准教授 眞嶋 俊造
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	文学研究科応用倫理研究教育センター Center for Applied Ethics and Philosophy 西川深雪 Miyuki Nishikawa

実施報告

本行事では、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士を含む3名の全体講演と50件の一般発表を行いました。応用倫理国際会議は2007年に始まり、2008年より毎年行って参りました。今回の会議のテーマは「安全、サステナビリティ、人性の涵養」でした。

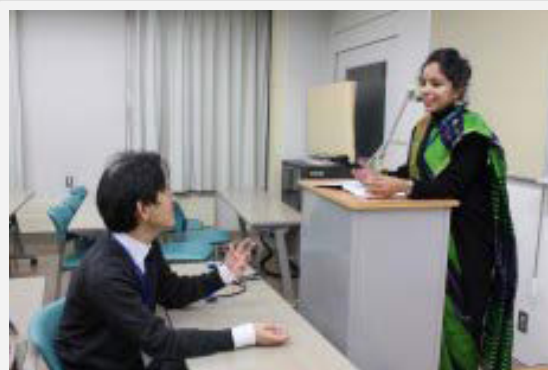
ジェイミソン博士は環境倫理における世界的な権威であり、サステナビリティの倫理についての研究の第一人者です。ジェイミソン博士の講演は‘Moral Responsibility for Climate Change’という題名で、気候変動に対する私たち市民の道德義務を倫理的に問うという内容でした。本講演は、気候変動の問題が私たちの倫理的な行動にかかっていることを指摘し、倫理的判断と倫理的行動をとる重要性を私たちに突きつける内容でした。

講演は特に予備知識を必要としない平易な語り口で進められ、なぜ私たちが気候変動に対して道德的義務を負うのかという理由が分かり易く説明されました。また、その責任というものが私たちに実際の行動を求めるということが説明されました。

次年度以降においても、サステナビリティの倫理を応用倫理国際会議の主要なテーマのひとつとしていく基盤を作ることができました。



全体講演の様子



一般発表での質疑応答の様子

サステナビリティウィーク北大・地球研合同ワークショップ 「地域や人びとに寄り添う研究の在り方とは？」



行事内容

開催日時	2014年11月1日(土) 開場: 9:00 開講: 9:30 終了: 17:45 (終了しました)
主催者	北海道大学工学研究院
共催	総合地球環境学研究所
会場	学術交流会館 第3会議室
言語:	日本語・英語(通訳なし)
対象:	専門家・大学生・院生

行事概要

1992年のリオサミット以降、地球規模での環境研究は様々に行われてきた。しかし、2012年のリオ+20の会議でも指摘されたように、いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い。この背景には、研究と社会の乖離があるとされ、ICSUは、社会と科学の連携を謳ったFuture Earth プログラムを推進している。では、社会と科学の連携とは何か?この議論を深めることが今後の環境研究の在り方を決めるうえで極めて重要なカギとなる。本ワークショップでは、公衆衛生や地域文化ならびに工学の研究と社会とがどのように連携できるのか?について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行い、「社会に寄り添う研究」とはなにか?どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについての理解を深めることを目的としている。

[ポスターデータ\(PDF\)をダウンロード](#)

サステナビリティウィーク北大・地球研合同ワークショップ

地域や人びとに 寄り添う研究の あり方とは?

北海道大学大学院工学研究院・
総合地球環境学研究所 共催

日時

2014年11月1日(土)
9:30~17:00

場所

**北海道大学・学術交流
会館・第3会議室**

1992年のリオサミット以降、地球規模での環境研究は様々に行われてきた。しかし、2012年のリオ+20の会議でも指摘されたように、いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い状況です。この背景には、研究と社会の乖離があるとされています。では、社会と科学の連携とは何でしょうか?この議論を深めることが今後の環境研究のあり方を決めるうえで極めて重要なカギとなります。本ワークショップは、農学や水産学、工学、政治学、地域研究などの研究と社会とがどのように連携できるのか?について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行い、「社会に寄り添う研究」とはなにか?どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについての理解を深めることを目的としています。

お問い合わせ先:

船水尚行(北大) funamizu@eng.hokudai.ac.jp
福土由紀(地球研) fuku@chikyuu.ac.jp

プログラム

09:30-10:00 受付
10:00-10:15 開会の辞(北海道大学大学院工学部)
10:15-10:30 趣旨説明
(田中樹・地球研)
10:30-11:00 石川智士(地球研)
「人と環境の良好な関係とは何か?—エリアバイビリティサイクルという考え方」
11:00-11:30 鍋島孝子(北大・メディアコミュニケーション)
「政治学からアフリカ農民を描く—統合水資源管理にみる農村の自治」
11:30-12:00 田中樹(地球研)
「人びとの暮らしに親和性のある砂漠化対処技術の形成」
12:00-12:30 昼食
13:30-14:00 清水貴夫(地球研)
「サーベルの飼育家の水食との戦い」
14:00-14:30 船水尚行(北大・工学)
「資源回収型サニテーションとその導入モデル」
14:30-15:00 牛島健(北大・工学)
「インドネシア都市スラム住民のトイレ買い換え行動モデル」
15:00-15:20 休憩
15:20-15:45 総合討論
16:45-17:00 閉会の辞(船水尚行・北大)

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 環境創生工学部門 教授 船水 尚行
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院サニテーション工学研究室 Laboratory on Engineering on Sustainable Sanitation 船水 尚行 Naoyuki Funamizu Mail: funamizu@eng.hokudai.ac.jp

実施報告

いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い状況です。この背景には、研究と社会の乖離があるとされています。では、社会と科学の連携とは何でしょうか？この議論を深めることが今後の環境研究のあり方を決めるうえで極めて重要なカギと考えました。本ワークショップは、農学、水産学、工学、政治学、地域研究などの専門家が集い、私たちの研究と社会とがどのように連携できるのか？について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行いました。そして、「社会に寄り添う研究」とはなにか？どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについて意見交換を行いました。

ワークショップでは6件の発表が行い、総合討論を約1時間30分にわたって行いました。これらの発表・討論から結論がでるようなテーマではありませんが、「人びとの暮らしを中心に据える」、「資源の利用者が守ろうとしないと自然は守れない」、「人々の目線による地道なフィールド調査」、「人々の価値の連鎖を中心にする」等の意見が出されました。



発表の様子



総合討論の様子

特別講演会「サステナビリティの倫理」



行事内容

開催日時	2014年11月2日(木) 開場: 16:00 開講: 16:30 終了: 18:00 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター
会場	人文・社会科学研究教育棟 W409室
言語: 英語 (通訳なし)	対象: 専門家・大学生・院生
行事概要	本講演会は、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士をお招きし、サステナビリティの倫理についてお話しいただきます。サステナビリティが大事だということは自明なことかもしれませんが、「なぜ、どうして大事なのか?」という理由を知ることもまた同じく重要でしょう。本講演会ではサステナビリティが大事な理由について理解を深めたいと考えております。
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 准教授 眞嶋 俊造
事前申し込み	不要 (直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	文学研究科応用倫理研究教育センター Center for Applied Ethics and Philosophy 西川深雪 Miyuki Nishikawa

実施報告

本講演会では、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士をお招きし、サステナビリティの倫理についてお話しいただきました。講演の題目は、'Sustainability and Beyond' でした。本講演の趣旨は以下の通りでした。「私たちの多くはサステナビリティが大事であり、重要であるということを信じています。しかし、私たちは「なぜ、サステナビリティが大事であり、重要なのか?」という問いについて考える機会はありません。ではないでしょうか。「サステナビリティが大事であり、重要であることの理由」を理解して初めて、私たちはサステナビリティを実現していくことの価値、またサステナブルな社会を構築していくことの重要性について、現実の重みをもって認識することができます。

そして、そのような認識は、サステナビリティの実現、サステナブルな社会の構築に向けて実践していく動機づけとなるのです。勿論、サステナビリティには問題が伴わないわけではありません。その一例として、世代間の正義と世代内の正義との間のトレードオフを挙げることができます。つまり、希少資源の分配を私たち現在世代の人々の間の地球規模での正義（グローバルな正義）と、私たち現在世代と私たちの子孫にあたる未来世代との間の正義（世代間の正義）はトレードオフの関係にあるということです。とはいえ、まずはサステナビリティの道徳的重要性を理解し、さらに議論を発展させていくことに意義があるのです。

本講演会は「第9回応用倫理国際会議」のポスト・カンファレンス・セミナーという位置づけでもあり、有機的に連動した行事として行うことができました。次年度以降においても、サステナビリティの倫理の講演会を継続的に開催していきたいと考えております。



デール・ジェイミソン教授の講演の様子①



デール・ジェイミソン教授の講演の様子②

保健科学研究院公開講座ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ



行事内容

開催日時	2014年11月3日(月) 開講: 13:00 終了: 16:00 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院保健科学研究院
言語: 日本語(通訳なし)	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を分かりやすく行います。講演予定については、次のとおりです。 第1限目は、「環境と健康一次世代への影響を考える」と題して、齋藤健教授が環境変化の健康影響、特に世代をこえた影響について話題提供いたします。 第2限目は、「光」を通して今見えること、そして将来出来ること～医療へ、そして日常へ～」と題して、尾崎倫孝教授が現代のストレス社会を強くしなやかに生きるために、体に優しい“光”が私達の生活にどのように貢献できるかについてお話しします。 第3限目は、「パーキンソン病のリハビリテーションについて」と題して、高橋光彦准教授が最新の知見も含め平易に解説し、デモンストレーションを行います。
北海道大学側の実施責任者	保健科学研究院 教授 浅賀 忠義
事前申し込み	10月24日(金)まで受け付け。電話(011-706-3315)およびメール(shomu[at]hs.hokudai.ac.jp)にて([at]を@に置き換えて送信ください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院保健科学研究院 Faculty of Health Science, Hokkaido University 医学系事務部保健科学研究院事務課 General Affairs Section, Faculty of Health Science, Hokkaido University mail: shomu[at]hs.hokudai.ac.jp ([at]を@に置き換えて送信ください)

実施報告

保健科学研究院の公開講座では「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を行い、63名の参加がありました。

第1限目は「環境と健康一次世代への影響を考える」と題して、齋藤健教授が環境変化の健康影響、特に世代をこえた影響について話題提供をしました。

第2限目は「“光”を通して今見えること、そして将来出来ること～医療へ、そして日常へ～」と題して、尾崎倫孝教授が現代のストレス社会を強くしなやかに生きるために、体に優しい“光”が私達の生活にどのように貢献できるかについて解説しました。

第3限目は「パーキンソン病のリハビリテーションについて」と題して、高橋光彦准教授がパーキンソン病のリハビリテーションについて、最新の知見も含め平易に解説し、デモンストレーションを行いました。講演者はサステナビリティ・ウィーク2014のテーマである「持続可能な開発のための教育」をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説しました。

参加者からはさまざまな質問があり、3人の各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。

今後も毎年同じ時期に、その時の時代を反映するようなテーマを設定して、公開講座を開催していく予定です。



挨拶をする伊達研究院長



尾崎教授の話に聞き入る参加者

RECCA 北海道 北海道における気候変動とその適応ワークショップ



行事内容

開催日時	2014 年 11 月 4 日 (火) 15:00～17:00 (終了しました)
主催者	工学研究院
後援	公益社団法人 日本気象学会 北海道支部
会場	学術交流会館 大講堂
言語:日本語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

文部科学省「気候変動適応研究推進プログラム」、北海道を対象とした総合的ダウンスケーリング手法の開発と適用では、2010年から5か年で、北海道地域における気候変動予測研究を実施してきました。その研究成果は、北海道の自治体をはじめ各産業セクターの近未来における気候変動対応にかかせない基礎情報となると考えています。本行事では、研究者・実務者・一般市民が対話と交流を通じて、地域の気候変動情報を共有し、それに対する適応のために、どうすればよいのかを議論します。

[ポスターをダウンロード\(RDF\)](#)

RECCA-Hokkaido
Research Program on Climate Change Adaptation
北海道における気候変動とその適応ワークショップ
—近年変化する降雨形態と防災について考える—

日時: 2014年11月4日(火) 14:30開場 15:00開会
場所: 北海道大学 学術交流会館 小講堂
札幌市北区北8条西5丁目

■ 基調講演
15:00～15:20 「近年の気象の傾向と防災に関して」
札幌管区気象台長 高野 清治
15:20～15:30 「北海道における気候変動研究の現状」
北海道大学 大学院工学研究院 准教授 山田 朋人
15:30～15:40 「RECCA-Hokkaidoで開発した近未来ビューワについて」
日本気象協会 北海道支社 主任技師 小倉 勉
(休憩)

■ 話題提供
15:50～16:00 「雪水文気象の変化が積雪地域にもたらす影響について」
富山工業大学大学院 工学研究科 教授 中津川 誠
16:00～16:10 「北海道における近年の気象と農業について」
北海道農業研究センター 生産環境研究領域 上席研究員 廣田 知良

■ パネルディスカッション 「変動する気象にどう適応していくのか」 16:10～17:10
パネリスト
札幌管区気象台長 高野 清治
北海道農業研究センター 生産環境研究領域 上席研究員 廣田 知良
富山工業大学大学院 工学研究科 教授 中津川 誠
北海道大学 大学院工学研究院 准教授 山田 朋人
北海道大学 大学院理学研究院 准教授 稲津 将
北海道大学 大学院地球環境科学研究院 准教授 佐藤 友徳

コーディネーター 日本気象協会 北海道支社 松岡 直基
司会 加藤 真奈美(気象予報士)

定員 150名
入場無料
※事前申込不要
直接会場にお越し下さい

CPD 土木学会認定継続教育(CPD)プログラムです。(2単位)

<問合せ> 北海道大学大学院
工学研究院
山田朋人
TEL: 011-706-6188

主催: 北海道大学大学院工学研究院
後援: 日本気象学会北海道支部

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 准教授 山田 朋人
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院 山田 朋人 mail: tomohito@eng.hokudai.ac.jp

実施報告

2010年度から文部科学省気候変動適応研究推進プログラム(RECCA)の一環で「北海道を対象とする総合的ダウンスケール手法の開発と適用(通称 RECCA- 北海道、代表:工学研究院 山田朋人)」が実施されています。

気候変動への対策は温室効果ガスの排出量の抑制を目的とする緩和策と気候変動下における持続可能な発展を目的とする適応策に大別されます。緩和策は国もしくは地球規模で取り組むものであるのに対して、適応策は各地域の特徴や状況を考慮しなければなりません。欧米各国では適応策の更新を数年に1度の頻度で義務づけるようになりつつあるものの、我が国では環境省が中心となり来年度の閣議決定を目指している段階です。本研究プログラムが開始されてから4年半が経過した現在、今後北海道が取るべき適応策について近年の豪雨災害や気候変動が農業分野に与える影響をあわせて議論することを目的に本ワークショップを開催しました。

RECCA- 北海道の研究成果として、複数の全球気候モデルと領域気象モデルによる世界の気温が2℃上昇した際の北海道の気温、降雨、積雪深等の特徴を紹介しました。その後、気候モデル、将来予測手法、さらには RECCA- 北海道によって予測された将来データをウェブ上で公開する「近未来ビューワ」についての説明がなされました。

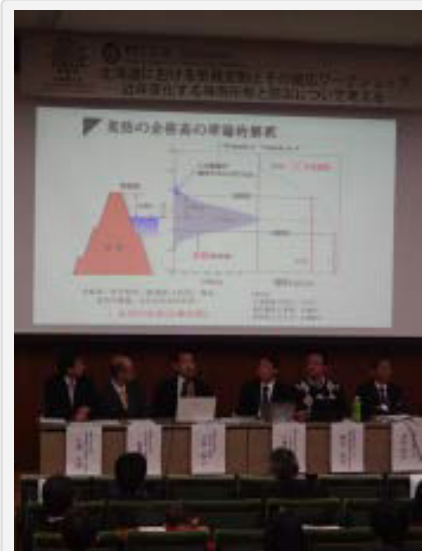
基調講演として、札幌管区気象台長の高野清治氏からは2014年9月に道央を襲った線状降水帯による豪雨の気象特性および豪雨発生前後の各行政機関の取り組みを含めた内容を頂戴し、室蘭工業大学大学院教授の中津川誠氏からは水文現象の変化が積雪地域に及ぼす影響について水資源の観点から最新の研究成果をご紹介頂きました。北海道農業研究センター上席研究員の廣田知良氏からは気候変動が北海道の農業活動に与える影響の正負両面について主要品目ごとに興味深い研究成果をご説明頂きました。

最後に上記の講演者と RECCA- 北海道の参画者である理学研究院の稲津将准教授と地球環境科学研究所の佐藤友徳准教授を含めた6名によるパネルディスカッションが実施され、豪雨、豪雪、水資源、農業の観点から北海道が取り組むべき適応策について活発な議論がなされました。

本ワークショップの参加者は161人であり、大学関係者、学生、関係分野の実務者に加え、多くの一般市民の方々にもご参加頂きました。イベント終了後に実施したアンケートでは、「今後の北海道における気候や各分野の適応策を考えるのに役立った」との回答が多くみられました。



会場全体の様子



パネルディスカッションの様子

雑紙削減プロジェクトPAPER SPACE ～身近なところから見つめなおそう～



行事内容

開催日時	2014年11月5日(水)～11月9日(日) 開場:9:00 終了:17:00 (終了しました)
主催者	PAPER SPACE
後援	北大元気プロジェクト
会場	学術交流会館
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生
行事概要	雑紙を利用した立体作品の展示を行ないます。 北大のキャンパスからは毎日膨大な量の紙が捨てられています。この紙ゴミを活用し、建築的な空間を作り出すこと(PAPER SPACE)によって、北大生・教職員一人ひとりが普段無意識に紙を捨ててしまっている問題を提起します。紙ゴミという身近な存在を通し皆でサステナビリティを考える機会を創出します。 予定プログラム ※屋外展示の場所が変更されました。 11/5～11/9: 屋外展示 @ 共用レクリエーションエリア(メインストリートと銀杏並木の交差点) 11/5～11/9: 学術交流会館 ホール 屋内展示
北海道大学側の実施責任者	工学研究院 尾門あいり
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	PAPER SPACE 坂本 mail: sakamoto.masa4@frontier.hokudai.ac.jp
URL	https://www.facebook.com/groups/1487970088155343/

実施報告

私たちの活動の目的は、サステナブルキャンパス実現に向けて先進的な取り組みを行っている北海道大学と、短い期間しかキャンパスで過ごさない学生・北大を訪れる市民・観光客といった大学の取り組みに無関心な大学利用者との乖離を埋め、両者の理解や認識を高めるきっかけづくりです。

本行事は、企画・準備・本番まで、すべて学生（北海道大学で建築を学ぶ学部2年生から修士2年生の学生を中心に、他学、他分野の学生合わせた33人。）で行い、北大のサステナブルキャンパス推進を知るきっかけとして、構内から大量に排出される雑紙を活用し、私たちが普段どれだけ無意識に雑紙を排出しているか、を実際に体感できる“空間作品”として再構成・提示しました。また、作品に活用した雑紙は、北大農場で牛の敷料・バイオマス原料として再活用・処理し、北大構内で排出されたゴミを北大構内で処理する、というサステナブルなシステムモデルの構築・提案も行いました。

期間中、建物内外の作品合わせて800人程度の来場者があり、うち、7割程度が学生でした。来場者からは作品に対する意見とともに、北大キャンパスに対して、「こういうアート展示を大学でやってほしいと思っていた!（学生）」「すごい量の雑紙ですね（学生）」「学生と触れ合えて面白い!（観光客）」「こんなに楽しい公園は初めて!（幼稚園児）」との意見もいただきました。また、企画側の学生からも、「普段の授業で実際の空間を作ることができないので楽しい」「色々な人の捉え方を知ることができて面白い」「これからもやりたい」との意欲的な感想も得ることができ、自分たちの作品を外部の人々に見てもらい反応を体感できたことに達成感を感じることができたようです。新聞社1社、テレビ局2局から取材を受けることができたのも、その反響から、実際に足を運んでいない人たちに私たちの活動を認識してもらえたことを実感しました。今後も学生の活動がキャンパス内の様々な場所で行われることにより、活動とキャンパスとが呼応し、より魅力的で付加価値の高いサステナブルキャンパス空間の形成、豊かな自然環境の積極的な活用や保全、活動を行う人々の人間関係の醸成、などにつながっていくでしょう。私たちの活動がそのような北大キャンパスの創造に貢献できるよう、次年度以降も継続していきたいと考えております。



紅葉を見に来た市民と学生の交流



説明に耳を傾ける市民の方と製作中の学生

協定校企画 フィンランドー日本ジョイントシンポジウム



行事内容

開催日時	2014年11月5日(水)～11月7日(金) (終了しました)
主催者	ラップランド大学、オウル大学、北海道大学、札幌市立大学
会場	ラップランド大学(フィンランド)
言語:英語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	オープニングセッションでは、ラップランド大学(フィンランド)、オウル大学(同)、北海道大学、札幌市立大学等の代表者が相互交流の更なる充実と発展を目指して、発表・討論を行います。また、分科会では「サービス・デザイン」「高齢化社会」「コミュニティー・プランニング」等を切り口に、最新の研究成果を共有し、今後の共同研究、共同教育の可能性について議論します。 【参考】 「フィンランドー日本ジョイントシンポジウム」特設ホームページ (外部サイト：英語のみ) http://www.ulapland.fi/InEnglish/About-us/News-Events/Events/Events-2014/SUSTAINABILITY-WEEKS-2014—Finnish-Japanese-Joint-Symposium
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部長 上田一郎
事前申し込み	必要
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際本部国際支援課 Division of International Services, Office of International Affairs, Hokkaido University Mail: gi-core@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

11月5日(水)から7日(金)までの3日間の日程で、ラップランド大学(フィンランド)において、「フィンランドー日本 ジョイントシンポジウムー Innovation and Well-being through Multidisciplinary Dialogueー」が開催されました。本シンポジウムは、本学「サステナビリティ・ウィーク」企画のひとつとして開催されたものであり、ラップランド大学、オウル大学、札幌市立大学、本学を中心に、約80名の参加がありました。

初日のオープニングセレモニーでは、ラップランド大学 マウリ・ユラコトラ学長の歓迎挨拶の後、オウル大学ウリ・ラユネン学長、及び本学 上田一郎 副学長から、来賓挨拶がありました。

その後、観光・ヘルスケア・都市デザイン等、テーマごとに5つの分科会に分かれて、2日間の議論や事例発表等が行われました。今回すべての分科会で「サービス・デザイン形式」という統一した手法が取り入れられました。サービス・デザイン形式とは、サービス・デザイン※1の過程で開発された、多様なステークホルダーから意見を効率的に聴取するための対話方式です。サービス・デザインが、ホスト校であるラップランド大学の研究を特徴づける学際融合分野のひとつであることから、分科会運営の共通手法として採用されました。参加者は、慣れない手法に最初は戸惑いつつも、普段はあまり接点がない異分野の研究者とも交流する等、よい感触を得ている様子でした。

最終日には、各参加大学からの基調講演が行われました。続いて行われたパネルディスカッションでも、参加者同士の活発な意見交換が進められ、本シンポジウムは成功裡に終了することができました。

今後は、本シンポジウムをきっかけとして、本学とフィンランドの協定大学、及び北極圏大学※2との間での研究者交流、共同研究の実施等、さらなる連携強化が期待されています。なお、来年の本シンポジウムは札幌で開催される予定です。

※1サービス・デザイン(Service Design)

サービス・デザインとは、あるサービスが供給者から需要者へ最も効果的に提供される仕組みの設計のこと。情報ネットワークシステムの構築、行政サービスの向上等にも応用されている。

※2北極圏大学(University of the Arctic)

カナダ、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、ロシア、スウェーデン、及びアメリカ合衆国(Arctic8)を中心とした北方圏における課題(環境問題、先住民、サステナビリティなど)にかかる教育・研究を推進するための教育機関ネットワーク。



シンポジウム関係者と意見交換する
上田理事・副学長



基調講演の様子



パネルディスカッションの様子

経済学研究科REBN シンポジウム ―北海道における新時代の「ものづくり」: IT×農業の試み―



行事内容

開催日時	2014年11月6日(木) 開場:13:00 開講:13:30 終了:17:00 (終了しました)
主催者	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター
共催	日本生産管理学会・北海道東北支部
後援	札幌コワーキング・サポーターズ(SCS)
会場	学術交流会館 大講堂
言語:日本語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 北海道は、「ものづくり」の後進地と言われて久しい。道内には、製造業におけるオンリーワン企業がいくつか散見されるものの、ものづくり集積地としての強みには乏しい。他方、近年急速に注目度が高まりつつある「メイカームーブメント」は、従来型のものづくりのあり方を革命的に変える可能性を秘めている。ものづくりに関しては大きく周回遅れだとされる北海道が、新しいタイプの「ものづくり」で強みを持つ可能性はどこにあるのだろうか。北海道の地域特性や産業特性を考える時、農業（酪農業や水産業など1次産業全般）、ITそしてメイカームーブメントのコラボレーションにこそ、その活路を見いだせるのではないだろうか。北海道における新しい「ものづくり」の可能性を、北海道の地域特性との関連で考えたい。

会場はこちら



北海道大学大学院経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター 2014年度シンポジウム
日本生産管理学会・北海道東北支部 特別講演会 後援:札幌コワーキング・サポーターズ(SCS)



**参加自由
無料**

北海道における新時代の「ものづくり」 IT×農業の試み

北海道は、「ものづくり」の後進地と言われて久しい。道内には、製造業におけるオンリーワン企業がいくつも散見されるものの、ものづくり集積地としての強みには乏しい。他方、近年急速に注目度が高まりつつある「メイカームーブメント」は、従来型のものづくりのあり方を革命的に変える可能性を秘めている。ものづくりに関しては大きく周回遅れだとされる北海道が、新しいタイプの「ものづくり」で強みを持つ可能性はどこにあるのだろうか。北海道の地域特性や産業特性を考える時、農業（酪農業や水産業など1次産業全般）、IT、そしてメイカームーブメントのコラボレーションこそ、その活路を見出せるのではないだろうか。北海道における新しい「ものづくり」の可能性を、北海道の地域特性との関連で考えたい。

日 時	講 演
11月6日(木) 13時30分より17時00分 (13時00分開場)	講 演 慶應義塾大学環境情報学部准教授 田中 浩也 氏 「ウェブ社会からファブ社会へ」 講 演 株式会社イーラボ・エクスパリエンス事業開発(R&D) 担当取締役 島村 博 氏 「Fab社会の到来:食と農のかしこい暮らし方」 講 演 株式会社 SUSUBOX代表取締役 FabLabつくば代表 相部 範之 氏 「FabLabつくばの歩み」
会 場 北海道大学学術交流会館 大講堂 北海道札幌市北区北8条西5丁目6 (北大正門入って左)	パネルディスカッション パネリスト 田中 浩也 氏 島村 博 氏 相部 範之 氏 コーディネーター 平本 健太(北海道大学大学院経済学研究科教授)

お問い合わせはEmail: sacade@econ.hokudai.ac.jp (単位まで)。
詳しくは、地域経済経営ネットワーク研究センターのHP (<http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/>) をご覧下さい。

北海道大学側の実施責任者	経済学研究科 教授 平本健太
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター事務局 塚田 久美子 E-mail: sacade@econ.hokudai.ac.jp
URL	http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/

実施報告

11月6日(木)、学術交流会館大講堂において、経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター・日本生産管理学会北海道東北支部共催、札幌コワーキングサポーターズ後援によるシンポジウム「北海道における新時代のものづくり ―IT×農業の試み」が開催されました。

本シンポジウムでは、慶應義塾大学の田中浩也氏、(株)イーラボ・エクスペリエンスの島村博氏、(株)SUSUBOX・FabLab つくば相部範之氏の3名を講師にお迎えし、それぞれご専門の立場から講演いただきました。具体的には、「ウェブ社会からファブ社会へ」「Fab社会の到来:食と農業のかしい暮らし方」「FabLabつくばの歩み」に関する、刺激的で有意義な内容でした。

シンポジウムの後半では、経済学研究科の平本健太教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われました。パネルセッションでは、フロアのオーディエンスから提出された多くの質問にもとづいて、講師の先生方とのディスカッションを行い、問題点や解決策を探りました。メイカームーブメントやファブ社会において、われわれの価値観がどのように変わっていくのか、ファブ社会が到来しつつある現状において、北海道はいかなるポジションでものづくりに関わっていけるのか、ITとのコラボレーションによる北海道農業や酪農業についての可能性はいかなるものかなど、あたらしい時代のものづくりを巡り、熱心で濃密な議論が展開されました。



パネルディスカッションの様子



会場の様子

GiFT2014 ～ Global issues Forum for Tomorrow ～



行事内容

開催日時	2014年11月8日(土) 配信開始:20:00 終了:21:45 (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	Ustream 配信 (http://www.ustream.tv/channel/gift2014)
言語:英語	対象:一般市民・大学生・院生
行事概要	GiFTのサイトが リニューアルしました! UstreamとFacebookでGiFTに参加しよう! Ustream 配信: 11月8日(土) 20:00-21:45 配信URL (Ustream): http://www.ustream.tv/channel/gift2014 Facebook URL: https://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u 持続可能な社会の実現に挑んでいる研究者 5 名のプレゼンテーションをインターネットで見て、英語と日本語で議論するインターネット・フォーラムです。  11月8日、夜 8 時からの放送に合わせ、Facebookと連動し、視聴されている方からのご意見や感想も募集します。 世界中の高校生と大学生に向けた、「一緒に世界の重要課題に挑もう!」との熱い呼びかけに、応答してください。

北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ・ウィーク実行委員会実行委員長 上田 一郎 (北海道大学理事・副学長)
問い合わせ先	北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局 (国際本部国際連携課内) E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp *[at]を@に変えて送信ください。
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

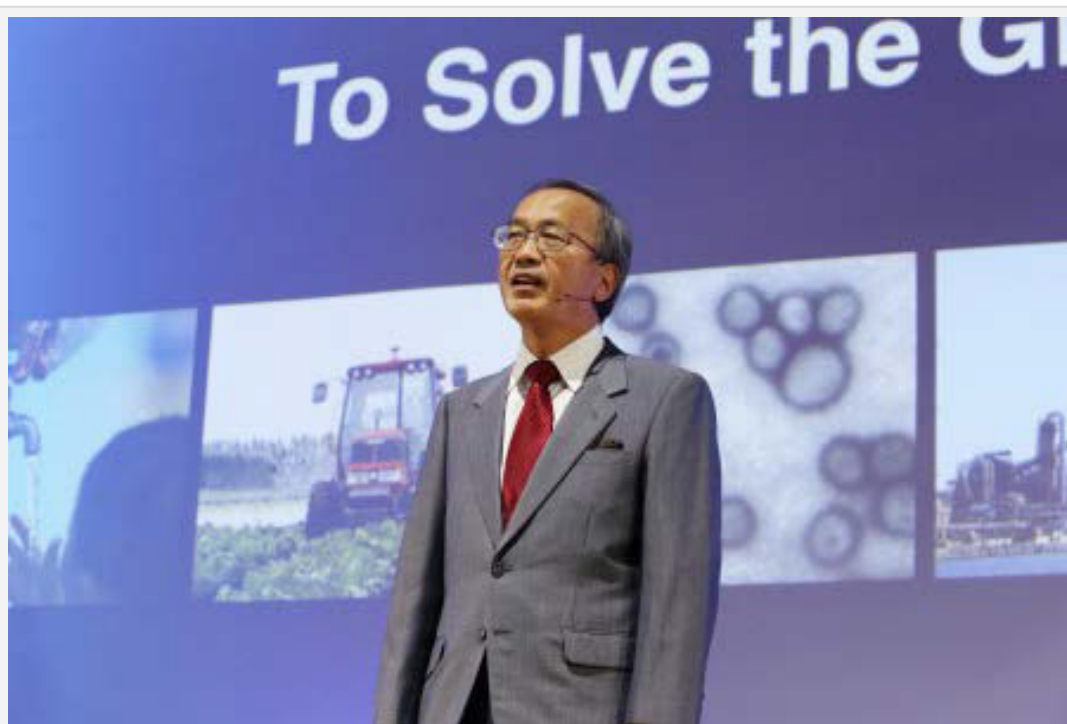
実施報告

サステナビリティ・ウィークの主要行事として毎年開催しているインターネット・フォーラム「GiFT」は今年で4回目を迎えました。今年は「教育」をテーマに5人の本学教職員がプレゼンターとして参加し、これからの教育の在り方、研究の在り方、大学の在り方などについて最新の研究成果と共に課題解決の展望を各自12分間、英語で講演しました。山口佳三総長によるプレゼンテーションでは、スペシャル対談として鈴木章名誉教授にも登壇いただきました。

インターネットを駆使した海外広報を進化させようと毎年新たなチャレンジを重ねているGiFTは今年、世界各地に住む高校生、大学生、高校教師とインターネットでつながり、北大のプレゼンテーションをパブリック・ビューイング（同時視聴）し、感想をFacebookでやり取りする双方向フォーラムを実現させました。11月8日に行なわれた2時間のGiFT番組への参加者は253人。わかる範囲だけでも、インドネシア、マレーシアといったアジアの国々や英国やスウェーデンなどの欧州の国々、カナダ、アメリカといった北米の国々、ナイジェリアなどのアフリカの国々から大学生・高校生問わず参加があり、交わされたメッセージは約200件に及びました。

生配信以降、YouTube およびUstream で閲覧可能となったアーカイブ動画は、公開から1か月間弱で日本はもちろんのこと世界各地から1800回以上（昨年のおよそ2倍）視聴され、その数は毎日増えています。

来年度もサステナビリティ・ウィークの主要行事として開催する予定です。



プレゼンテーション：北海道大学 総長 山口佳三



山口総長と鈴木名誉教授の対談の様子



プレゼンテーション:理学研究院 教授 高橋幸弘



プレゼンテーションCOSTEP 大津珠子



プレゼンテーション:工学研究院准教授 渡邊直子



プレゼンテーション: サステイナブル・キャンパス推進本部 池上真紀



Ustream 配信の様子

北大×JICA 連携企画 国際協力人材セミナー in 札幌



行事内容

開催日時	2014年11月8日(土) 開場: 9:10 開講: 9:30 終了: 16:30 (終了しました)
主催者	国際協力機構(JICA)
会場	北海道立道民活動センター(カデル2・7)
言語: 日本語	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	JICA 国際協力人材部では、外務省国際機関人事センター、国際機関、及び開発コンサルタント企業やNPO/NGO等の協力により、社会人や大学院生等を対象に「国際協力人材セミナー」を開催します。 JICAをはじめとする国際協力実施機関が会場に集結。セミナーでは、人材に求める資質や能力等について紹介するとともに、JICA 及び各機関・団体の業界動向等についても解説します。また、国際協力分野で勤務されている講師をお招きし、現場の生の声や実態、仕事のやりがいなどを赤裸々にお話しいただきます。1日で国際協力業界の様々な仕事・キャリアについて知ることができます! 《プログラム》(注)プログラムは予告なく変更となる場合がありますのでご了承ください。 時刻 本プログラム 10階 1060会議室 10階 1070 会議室 09:30 ~10:50 (A) 全体セッション ・開会、進行説明 ・開催挨拶 ・国際協力の全体像 ・JICA 人材の紹介 ・JICA 公募案件についての説明 ・PARTNER サイトの紹介 講師: JICA 国際協力人材部 過去のセッションレポートはこちら - 休憩10分 -

11:00～12:00 (B)JICAセッション (1) 公募型企画調査員

- ・JICA 公募案件についての説明
- ・体験談 公募型企画調査員

講師：JICA 国際協力人材部

JICA 企画調査員経験者

過去のセッションレポートはこちら

(C)NGOセッション

- ・NGOで働くということ

講師：北海道 NGO 相談員

過去のセッションレポートはこちら

－ お昼休み －

13:00～14:00 (D) 開発コンサルタントセッション

- ・開発コンサルタント業界の概要について
- ・開発コンサルティング企業が求める人材像

講演団体：一般社団法人 海外コンサルティング企業協会 (ECFA)、アイ・シー・ネット株式会社

過去のセッションレポートはこちら

－ 休憩10分 －

14:10～15:00 (E) JICAセッション (2) 民間セクター

- ・『JICA』の取り組み、民間セクターによる国際協力について説明

講演団体：JICA 北海道国際センター、日東建設株式会社

過去のセッションレポートはこちら

－ 休憩10分 －

15:10～15:40 (F) 国際機関セッション (1)※

- ・国際公務員になるために

講演団体：外務省国際機関人事センター

過去のセッションレポートはこちら

15:40～16:30 (G) 国際機関セッション (2)

- ・国際機関の仕事について

講演団体：国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)

過去のセッションレポートはこちら

※ JPO 派遣制度についての説明がありますが、同制度は35歳以下が対象です。

また、YPP 試験についての説明がありますが、応募は32歳以下となっております。

注：JICA 職員の採用説明会ではありませんので、お間違えのないようご注意ください。

具体的な職業紹介、斡旋などは行っておりません。

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部 国際連携課 国際協力マネージャー 榎本宏
事前申し込み	必要（下記参照）
参加費	無料予定
問い合わせ先	国際協力人材セミナーPARTNER 事務局 Email: jicahrp[at]jica.go.jp 下記ウェブサイトからお申し込みの上、ご参加ください（申込受付期間：10/7～11/7） http://partner.jica.go.jp/semi/jinzai/20141108_hokkaido.html
URL	http://partner.jica.go.jp/semi/jinzai/20141108_hokkaido.html

実施報告

JICA 国際協力人材部では、国際協力の現場で活躍を目指す人材に対する関連情報の提供と国際協力活動への参加促進を目的とした「国際協力人材セミナーin北海道」を実施しました。事前申込153名のうち、最終的に137名の参加があり、うち135名は北海道内からの参加者、また学生・大学院生が約65名を占めていました。

プログラム及び各セッションの概要は、以下のとおりです。

- (1)「国際協力のキャリアを目指す方へ」と題した国際協力業界の動向説明及び国際協力の仕事全般の解説
- (2) JICA人材の紹介(公募案件)及び北海道在住の公募型企画調査員の体験談
- (3)「ODAを活用した中小企業海外展開支援事業」についての解説と事例紹介及び日東建設株式会社からナイジェリアにおける取り組み事業紹介
- (4)「NGOで働くということ」をテーマに、一般財団法人北海道国際交流センター所属のNGO相談員の講演
- (5)「開発コンサルタント業界の概要」、「開発コンサルタントに求められる人材像」をテーマに、それぞれ一般社団法人海外コンサルティング企業協会(ECFA)及び同協会の会員企業であるアイ・シーネット株式会社の講演
- (6) 外務省国際機関人事センターより「国際公務員になるために」、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)より「国際機関の仕事について」の講演

参加者全員に対して実施したアンケートは115名から回収し、112名より「非常に満足」又は「満足」の回答を得るなど、非常に満足度の高い(98%) セミナーを提供することができたと考えています。

参加者からは、「国際協力に関する様々な立場の方からお話を伺うことができ、多角的に具体的に自身のキャリアプランを考えるよい情報をたくさん頂きました。」「普段関わることがない大人の方たちの話を聞くことができ貴重な時間を過ごすことができました。今後も定期的の実施して頂きたいです。」「国際協力人材セミナーは将来国際機関で働きたいと思っている私にとってすごく良い機会となりました。ただ、このようなセミナーなどが東京に集中し、札幌で聞く機会が少ないのは残念です。今後、数を増やすことはできないのでしょうか。」などのコメントが寄せられました。

当日は、会場と同時に多数の人が詰めかけ、またセミナー終了後も講師の方に熱心に質問する参加者も多数見受けられるなど、参加者の熱意に触れました。JICAとしては、引き続き国際協力に関する情報提供の必要性を実感しました。



講演の様子

安全でサステナブルな社会の土台をつくるには？—社会基盤学からの多様な視点—



行事内容

開催日時 2014年11月8日(土) 開場: 12:30 開講: 13:00 終了: 15:30 (終了しました)

主催者 工学部 環境社会工学科 社会基盤学コース・国土政策学コース

会場 学術交流会館 小講堂

言語: 日本語(通訳なし) **対象:** 一般市民・大学生・院生

行事概要 気温の上昇、自然災害の激化、枯渇の一途をたどる天然資源、水や空気の汚染… 地球規模で進む自然環境の変化に立ち向かわざるを得ない状況に世界中の科学者は立たされています。「社会基盤学」とはこれらの自然環境の変化がもたらす影響を予測すると共に、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会の土台を構築するための学問です。そのため社会基盤学がカバーする範囲は水や大気、地盤、材料、交通システムなど多岐に渡り。社会の持続可能な発展のために不可欠な要素を網羅しています。本プログラムでは、人々の日々の生活をより良くするために本学問がどう貢献しているかについて紹介すると共に、安全でサステナブルな社会を支える社会基盤学の重要性についてお話しします。



学術交流会館(クリックで拡大)



安全でサステナブルな社会の土台をつくるには？ — 社会基盤学からの多様な視点 —

The Role of Civil Engineering for a Safe and Sustainable Society

— A diverse field for the diverse needs of the developed and developing world —

気温の上昇、自然災害の激化、枯渇の一途をたどる天然資源、水や空気の汚染…わたしたち人類は地球規模で進む自然環境の変化に立ち向かわざるを得ない状況に追い込まれています。地球のあらゆる問題を工学的に扱う領域として「社会基盤学」があります。自然環境の変化がもたらす影響を予測すると共に、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会の土台を構築するための学問です。具体的には、水や大気、地盤、材料、構造物設計、交通システムなどを対象とし、社会の持続可能な発展のために不可欠な要素を網羅しています。本プログラムでは、人々の日々の生活を支えるために本学がどう貢献しているかについて紹介すると共に、サステナビリティの観点でどう進化しているか、また今後どこに向かうのかについて話題提供し、皆様と議論をしたいと思いをします。

Societies around the world are faced with a growing number of environmental challenges, including rising temperatures, increasing frequency of natural disasters, depletion of natural resources, air and water pollution, and more. Civil engineering plays an important role in understanding the impacts of these environmental changes and providing the tools and infrastructure necessary for safe, resilient, and healthy development. One unique characteristic of civil engineering is the breadth and depth of its reach, as it touches on nearly all essential aspects of sustainable development. In this program, we talk about the importance of civil engineering as the foundation for a safe and sustainable society by introducing the diversity of its fields and how they play a role in improving people's everyday lives.







大学1年生に宛てて分かりやすく、
サステナビリティについてお話しします。
お気軽にお越しください！

日時： 2014年11月8日（土）13:00~14:30（途中入退室自由）
会場： 北海道大学 学術交流会館 小講堂（北8西5）
申込： 不要（直接会場へお越しください）
料金： 無料
言語： 日本語
主催： 北海道大学 工学部 社会基盤学コース・国土政策学コース
講演者： Michael Henry, 内田賢悦, 山田顕人, 西村聡, 橋本勝文, 猿渡亜由未（社会基盤/国土政策学コース）、塚澤司（日本サステナビリティ研究所）
URL： <http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/2014/civileng/>

北海道大学側の実施責任者 工学研究院環境フィールド工学部門 助教 Michael HENRY (ヘンリーマイケル)

事前申し込み 不要（直接会場へお越し下さい）

参加費 無料

問い合わせ先 工学研究院環境フィールド工学部門
猿渡亜由未

mail: [saruwata\[at\]eng.hokudai.ac.jp](mailto:saruwata[at]eng.hokudai.ac.jp)

URL <http://www.eng.hokudai.ac.jp/edu/course/civileng/index.html>

実施報告

本シンポジウムは、自然環境の変化がもたらす影響を予測すると共に、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会の基盤を構築するための学問である社会基盤学が、持続可能な社会の構築にどのように貢献しているかを紹介する為のイベントとして開催したものです。

社会の持続可能な発展について長く研究されてきた日本サステナビリティ研究所 堺教授に基調講演をして頂いた後、北海道大学工学部社会基盤学コース、国土政策学コースにおいてコンクリート工学、地盤工学、海岸工学、水文学、交通計画学を専門として研究を行う若手教員7名が10分間ずつ各専門分野と社会の持続可能性との関わりについて講演を行いました。

参加者の6割は大学生～大学院生であり、皆メモを取りながら熱心に話を聞いていました。イベント終了後に実施したアンケートでは「色々な分野からの視点が分かりやすく解説されており面白かった」、「社会基盤学を学ぶ上で環境、経済、社会との関わりを考える重要性がわかった」等の反応が多く見られ、参加者は概ね満足していたものと考えます。一方「もっと大々的に告知を行った方がいい」との意見も多く寄せられ、来年のイベント時にはPR方法を工夫するべきとの課題も明らかになりました。

我々を取り巻く様々な自然現象のメカニズムを解明し、持続可能な社会の構築に貢献する社会基盤学の取り組みを、広く一般に知ってもらう為に、来年以降も本イベントを継続してきたいと思います。



講演の様子



講演者の集合写真

第5回学生企画 サステナブル・キャンパス・コンテストーサステナブルな明日への架け橋ー



行事内容

開催日時	2014年11月9日(日) 開場:12:00 開講:13:00 終了:18:00 (終了しました)
主催者	SCSD(The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University)
共催	北海道大学 サステイナブルキャンパス推進本部
会場	学術交流会館 第一会議室
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生

行事概要 北大生の手により、北大を世界1サステナブルなキャンパスにすることを目的に今年もサステナブルキャンパスコンテスト(11月9日土曜日)を開催します。コンテストでは、「北大の持続可能な“環境(自然環境・施設環境・人間環境)”作りに貢献する実践的な活動」を広い分野で審査します。対象は北大の学生に限らず他大生・市民とし、応募資格はプロジェクトに主体となって取り組むことの可能な人であることです。最優秀賞を取られた場合には実行予算とSCSDの学生及び各方面の協力を約束します。審査は北大教授・北大事務職員・生協職員他、当日の一般参加者の投票により行われ当日の発表とその場でのディスカッションから総合的な評価で行われます。今年のテーマは「“自然な”北大」とし、自然保護だけでなく日頃、変だなと思うところ、もっとこうできるという改善点、或いはこういう姿であるべきだという広い意味での“自然な”北大の姿を募集します。

[会場はこちら](#)



北海道大学側の実施責任者	北海道大学 理学部2年 小山田伸明
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	SCSD(The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University) mail: scsdmail[at]gmail.com
URL	http://scsdhome.web.fc2.com/

実施報告

本コンテストは今年度で5回目となり、北大で活動するあるぼら、北大畑くらぶ、雑紙削減プロジェクトの3組の学生に大学をサステナブルにするプロジェクトを提案して頂きました。今年度初の取り組みとして、本イベントの1か月ほど前に中間報告会を実施し、SCSDや教職員、提案者と共に議論し、案のブラッシュアップを行いました。そのため、本イベントでは非常に質の高い提案がなされました。

今回は接戦の結果、北大畑くらぶが最優秀賞を受賞し、その内容は全学の学生が任意で使えるような農場を作ろうというものでした。全学農場を通して学生が体験によって、普段おろそかにしがちな“食”というものについて真剣に考える機会を作ることができるというメリットに加え、その際のアシストや情報発信の方法までをカバーして考えられていたことが評価されました。このプロジェクトはSCSDと共に畑クラブが実行して行く予定で、状況経過はFacebookなどで発信していきます。

今後もサステナブルキャンパスコンテストを学生の意見を大学へ届ける窓口としての機能を充実していくために、今後も知名度の向上や応募しやすい環境整備などを進めていきます。



授賞時風景



北大畑くらぶ(最優秀賞)の発表風景

国際シンポジウム 環境と健康と科学コミュニケーション



行事内容

開催日時 2014年11月17日(月) 開場: 13:00 開講: 13:30 終了: 17:00 (終了しました)

主催者 環境健康科学研究教育センター

共催 保健科学研究所、医学研究科、地球環境科学研究所

後援 札幌市、札幌市教育委員会、北海道、北海道教育委員会、環境省北海道地方事務局

会場 学術交流会館 小講堂

言語: 日本語・英語 (同時通訳)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 科学技術の発展は、人類に繁栄と豊かな生活をもたらす一方、環境や安全、生命倫理など、国際規模で解決しなければならない問題も生み出しています。基礎研究や先進的な研究開発の成果を社会に提供し、科学技術と社会との双方向のコミュニケーションを確立する必要性が説かれています。そこで本シンポジウムでは、近年の環境変化が人びと、特に子どもや高齢者など弱い人びとの健康に与える影響を題材に、持続可能な社会のための教育や科学技術コミュニケーションにおける課題について、研究者自身のコミュニケーション活動への関わりと、地域住民との対話や学び合いの場の創出に取り組むコミュニケーターとが集い、諸外国の事例も交えて人々の知識を深め、討論の機会とします。

■司会

山内太郎 (北海道大学大学院保健科学研究所・環境健康科学研究教育センター兼務)

田中俊逸 (北海道大学大学院地球環境科学研究所・環境健康科学研究教育センター兼務)

■講演および、パネルディスカッション (日英同時通訳)

1. 「科学コミュニケーションの話を始める前に～これだけは押さえておきたい三つの視座～」

三上直之 (北海道大学高等教育推進機構・環境健康科学研究教育センター兼務)

2. 「子ども・社会がより健康になるための、韓国におけるリスクコミュニケーション戦略」

Jonghan Leem (Department of Occupational & Environmental Medicine, Inha University Hospital, Korea)

3. 「北海道に住む人々のよりよい生活環境を目指して～北海道スタディの成果から～」

伊藤佐智子 (北海道大学環境健康科学研究教育センター)

4. 「科学コミュニケーションの技術: 子宮頸癌ワクチンの受容が、英国・豪州・日本で異なるのは何故か」

Sharon J. B. Hanley (北海道大学大学院医学研究科・環境健康科学研究教育センター兼務)

5.「受け手からみた健康研究と成果発信～市民やジャーナリズムの視点から」

大島 寿美子(北星学園大学文学部 心理・応用コミュニケーション学科)

[会場はこちら](#)



北海道大学側の実施責任者 環境健康科学研究教育センター 特任教授 岸玲子

事前申し込み 必要 (当日参加も受け付けます) ([こちらから](#))

参加費 無料

問い合わせ先 環境健康科学研究教育センター 荒木・高橋

E-mail: Aaraki[at]cehs.hokudai.ac.jp , mtakahashi[at]cehs.hokudai.ac.jp

URL <http://www.cehs.hokudai.ac.jp>

実施報告

「環境と健康と科学コミュニケーション」のテーマのもと、近年の環境変化が人々、特に子どもの健康に与える影響を題材とした講演を行い、持続可能な社会に向けた、教育や科学コミュニケーションにおける課題について、諸外国の事例を交えて参加者様の知識を深め、ディスカッションを実施する機会とした。

1. 北海道大学 高等教育推進機構 三上 直之准教授「科学コミュニケーションの話を始める前に～これだけは押さえておきたい三つの視座～」
2. Inha University、Korea Jonghan Leem「子ども・社会がより健康になるための、韓国におけるリスクコミュニケーション戦略」
3. 環境健康科学研究教育センター伊藤 佐智子特任助教「北海道に住む人々のよりよい生活環境を目指して～北海道スタディの成果から～」
4. 北海道大学大学院 医学研究科 Sharon J. J. Hanley 特任助教「科学コミュニケーションの技術：子宮頸癌ワクチンの受容が、英国・豪州・日本で異なるのは何故か」
5. 北星学園大学 大島 寿美子教授「受け手からみた健康研究と成果発信～市民やジャーナリズムの視点から」

最初に三上直之准教授（北海道大学高等教育推進機構）が、リスク社会に生きる我々に今なぜコミュニケーションが必要か、コミュニケーションの目的の多様性、またコミュニケーションへのステークホルダーの参加が欠かせない点に関して講演した。次いで仁荷大学校のJonghan Leem 教授が、韓国における子どもの健康に関する問題とリスクコミュニケーションについて講演した。同じく子どもの研究に関して、伊藤佐智子特任助教（環境健康科学研究教育センター）が、環境化学物質曝露による影響に関する「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」の紹介と、研究結果に関して地域社会とのコミュニケーションのあり方について講演した。Sharon J. J. Hanley 特任助教（医学研究科）から、子宮頸癌ワクチン接種導入に当たり、イギリス政府が行った啓発・教育・リスクコミュニケーションの事例に関して、続いて大島寿美子教授（北星学園大学）より、科学研究者による情報発信を、受け手である市民やメディアが理解を共有する重要性や手法について講演があった。続く、パネルディスカッションでは、フロアからの質問や意見を交え、司会の山内太郎教授（保健科学院）・田中俊逸教授（地球環境科学院）及び講演者による討論が行われた。研究成果発信に於いては、Leem 教授による発表にみられた①科学的証拠（エビデンス）の確立、②正直・率直な情報の開示、③政策決定の協力者としての国民参加の必要、④国民の不安の共有といった4つの科学コミュニケーション戦略に見習う点が多かった。最後に、北海道スタディ研究の代表者でもある岸副センター長から、これまでも参加者コミュニケーションとして継続的に行ってきたこと、今後北海道の地域のデータで世界に貢献していくことの重要性に関する発言があり閉会となった。

参加者のアンケートからは、「新たな視点を得た」「海外の事情を知ることができて有意義だった」「研究者が市民とのコミュニケーションに取り組んでいることを知ることができた」といったコメントが得られた。今後も引き続き科学コミュニケーションに関する討論の場を提供する意義を再認識するシンポジウムとなった。



三上准教授による講演



パネルディスカッションの様子

北大アフリカ研究会シンポ アフリカで活躍する北大の研究者たち II
～アフリカに展開する北大研究ネットワーク～



行事内容

開催日時	2014年11月18日(火) 開場: 15:00 開講: 15:30 終了: 17:30 (終了しました)
主催者	北海道大学アフリカ研究会
共催	日本アフリカ学会北海道支部(2014年度第2回例会)
会場	工学部 A101 会議室
言語: 日本語(通訳なし)	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	今まさに目覚ましい発展を遂げようとしているアフリカ。アフリカにおける持続可能な社会の構築は、まさにこれからの重要なトピックです。しかし、ひとたび現地に入れば、まだまだ貧困、政治、環境をはじめ様々な問題が山積し、しかもそれらは複雑に絡まりあっていることがわかります。アフリカのサステナビリティを議論するには、分野横断的な学際的アプローチが求められます。北大では2012年4月、アフリカ研究に関わっている北大の研究者が集まり、北大アフリカ研究会(HURNAC)を立ち上げました。さまざまな専門をもつ北大研究者がネットワークを作り、アフリカの課題に取り組んでいます。本イベントでは、HURNACのメンバーがそれぞれのアフリカでの取り組みを多様な視点から紹介します。
北海道大学側の実施責任者	工学研究院 特任助教 牛島 健
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院工学研究院 牛島 健 mail: uken@eng.hokudai.ac.jp
URL	http://aa.vetmed.hokudai.ac.jp/africa/

実施報告

目覚ましい発展を遂げようとしているアフリカ。しかし、ひとたび現地に入れば、まだまだ貧困、政治、環境をはじめ様々な問題が山積し、しかもそれらは複雑に絡まりあっていることがわかります。アフリカのサステナビリティを議論するには、分野横断的な学際的アプローチが求められます。北大では2012年4月、アフリカ研究に関わっている北大の研究者が集まり、北大アフリカ研究会 (HURNAC) を立ち上げました。さまざまな専門をもつ北大研究者がネットワークを作り、一筋縄ではいかないアフリカの課題に取り組もうとしています。本年度からは、日本アフリカ学会北海道支部との連携が実現し、本行事も共催となっています。昨年引き続き、第2回となる本イベントでは、観光学高等研究センター、経済学研究科、保健科学院、獣医学研究科に属するメンバーが、アフリカでの取り組みをそれぞれの視点から紹介しました。多様な専門性からの話題・内容でしたが、どの講演者もわかりやすい言葉で伝える努力をしていましたので、十分に理解していただけただけようです。参加者は合計25名で、そのうち学生7名を含む15名が学内関係者、10名が一般もしくは未記入でした。一般の中には、市民の方(7名)やJICA関係者(1名)が含まれていました。こじんまりとした雰囲気の中、通常のHURNAC会合時のように突っ込んだ議論が、一般参加者といっしょに展開されたことは価値があると感じました。

アンケート(有効回答21件)では、「あなたの今後の活動に有益となりそうですか?」の問いに対し、10名が「大変そう思う」、11名が「そう思う」と回答していて、参加者の満足度は高かったものと思われます。また、昨年度のアンケートで「アフリカ出身者(留学生など)による発表も聞くことができるとよい」という趣旨の意見を複数いただいていたのですが、今回、経済学研究科に所属するコンゴ人学生の発表が実現したことも大きな成果でした。

今後とも、こうしたイベントを通じてHURNACの取り組みを大学内外にアピールできるよう努めていきます。



西山徳明教授による発表の様子

大学改革シンポジウム サステナブルキャンパス国際シンポジウム 2014

サステナブルキャンパス構築のための思想と実践—大学にとって「地域」とは—



行事内容

開催日時	2014年11月25(火) 開場: 12:30 開講: 13:00 終了: 17:45 (終了しました)
主催者	サステナブルキャンパス推進本部
共催	一般社団法人 国立大学協会
後援	北海道, 札幌市, 一般社団法人 日本建築学会北海道支部
会場	学術交流会館 大講堂
言語	日本語・英語 (同時通訳) 対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	サステナビリティ・ウィークの一環として行われるサステナブルキャンパス国際シンポジウムは2011年から始まり、今回で4回目を迎えます。 昨年のシンポジウムでは、「地域と連携したサステナブルキャンパスの構築」をテーマに、大学キャンパスの役割を地域計画の中でどう位置づけるかが主題となり、本学札幌キャンパスは、市街中心部において他との明解な境界を持つにも関わらず、市民、観光客との相互作用が起きやすい環境にあるとの指摘から、その“浸透膜”のような柔らかい境界を活かしたキャンパスづくりを目指すべきであるとの意見で議論が締めくくられました。 これを踏まえ、今回は「サステナブルキャンパス構築のための思想と実践—大学にとって地域とは—」をテーマに、なぜサステナブルキャンパスが必要なのか、諸外国において、大学の地域連携はサステナブルキャンパス構築の文脈の中でどのように位置づけられているのか、といった思想的・実践的課題について講演を行います。さらにその後のパネルディスカッションでは、北大にとっての「地域」を想起しながら、地域連携のためにキャンパスがどのように活用できるか、その可能性を議論します。



会場はこちら



※駐車場はありませんので、公共交通機関のご利用をお願い致します。

北海道大学側の実施責任者	サステイナブルキャンパス推進本部 横山 隆
事前申し込み	必要 (こちらから)
参加費	無料
問い合わせ先	サステイナブルキャンパス推進本部 E-mail:osc[at]osc.hokudai.ac.jp
URL	http://www.osc.hokudai.ac.jp/

実施報告

本シンポジウムは「サステナブルキャンパス構築のための思想と実践ー大学にとって「地域」とはー」をテーマに開催しました。

最初に、京都大学経済学研究科の植田和弘教授の講演があり、Human development (人間発達) を促す場としての大学の役割を強調されました。特に、持続可能な社会の担い手育成には、地域との協働を含む社会的学習が不可欠であり、従来の大学キャンパスもそのための場として変化していく必要性を示されました。

続いて、ルクセンブルク大学アリアネ・ケニック博士は、そのような変化が、海外の大学でどのように起きているか、実際の例を交えた講演を行って下さいました。ルクセンブルク大学では、まさに Human development を目指し、学生自らが太陽光発電組合のビジネスモデルを検証する等、地域課題に根差した教育プログラムの実践例を紹介して下さいました。

その後のパネルディスカッションでは、文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課の森政之整備計画室長、札幌市の生島典明副市長、本学の吉見宏経済学研究科長らがパネリストとして加わり、地域連携のためにキャンパスがどのように活用されうるか、その可能性について議論しました。ブリティッシュコロンビア大学のCIRS (Center for Interactive Research on Sustainability) やルクセンブルク大のベルバル新キャンパスにおける計画手法が、海外のキャンパス計画・開発の事例として紹介されました。これらの事例は、さまざまなステークホルダーを巻き込んで計画の改善を行っているという点がこれからの日本のキャンパス計画・開発において新しい切り口となる可能性の示唆がありました。



ケニック教授による講演の様子



植田教授による講演の様子



集合写真

新しい農業生産のやり方 ―エコロジー農業の日仏交流―



行事内容

開催日時	2014年12月10日(水) 開始:14:00 終了:16:30 (終了しました)
主催者	札幌日仏協会 / アリانس・フランセーズ札幌, フランス大使館, アンスティチュ・フランス 日本
共催	北海道大学農学研究院, 北海道大学国際本部
会場	農学部4階大講堂
言語: 日仏同時通訳	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	気候変動を始めとする地球環境の変化は、農業生産のプロセスに決定的な変化をもたらしています。地域の特性に適し、環境に配慮しつつ、経済的に競争力を持つ農業システムとはどのようなもののでしょうか。フランスと北海道における優れた事例にあたり、市民・専門家・大学関係者等さまざまな立場から共に考え、議論しましょう。 ※ 去年の様子はこちら 【司会】 * 林美香子(北海道大学大学院農学研究院客員教授、慶応義塾大学特任教授) 【ファシリテーター】 * 内田義崇(北海道大学大学院農学研究院助教) 【パネリスト】 * エティエンヌ・アンズラン(農学開発研究国際協力センター理事長顧問、オタワ大学客員教授) * エリック・ジリ(農業・農産加工政策及び国土総局農産加工戦略及び持続可能な発展部部長) * 小谷栄二(ファームエイジ株式会社代表取締役) * 前多幹夫(北海道十勝地区農協青年部協議会副会長) * 三谷朋弘(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター学術研究員) * 久田徳二(北海道大学大学院農学研究院客員教授、北海道新聞) 【参加予約】 https://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/application/

【PDFチラシ】

http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/upload/agriculture_flyer.pdf

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2014
公開討論会

「新しい農業生産のやり方 — エコロジー農業の日仏交流」

気候変動を始めとする地球環境の変化は、農業生産のプロセスに決定的な変化をもたらしています。地域の特性に適し、環境に配慮しつつ、経済的に競争力を持つ農業システムとは、どのようなものでしょうか。フランスと北海道における優れた事例にあたり、共に考え、議論しましょう。

日時：12月10日(水)14:00-16:30
会場：北海道大学農学部4階大講堂
入場無料／要予約／同時通訳付

【参加申し込み】
北海道大学サステナビリティ・ウィーク <http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/application/>
札幌アリアンス・フランセーズ TEL:011-261-2771

＜司会＞
林 美香子（北海道大学大学院農学研究院客員教授、慶應義塾大学特任教授）

＜ファシリテーター＞
内田 義崇（北海道大学大学院農学研究院助教）

＜パネリスト＞
エティエンヌ・アンズラン（農業開発研究国際協力センター理事長顧問、オタワ大学客員教授）
エリック・ジリ（農業・農産加工政策及び国土総局農産加工戦略及び持続可能な発展部部長）
小谷 栄二（ファームエッジ株式会社代表取締役）
前多 幹夫（北海道十勝地区農協青年部協議会会長）
三谷 朋弘（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター学術研究員）
久田 徳二（北海道大学大学院農学研究院客員教授、北海道新聞）

共催：札幌日仏協会／アリアンス・フランセーズ札幌、フランス大使館、アンステティム・フランセ日本、北海道大学農学研究院・国際本部

SPJS札幌日仏協会       

事前申し込み [参加申込サイト](#) からお申し込みください。
12月9日(火)まで受付。定員に達し次第締切ります。

参加費 無料

問い合わせ先 札幌アリアンス・フランセーズ
平岡智成
E-mail: [bureau\[at\]afsapporo.jp](mailto:bureau[at]afsapporo.jp)
([at] を @ に置き換えて送信してください)

実施報告

エコロジー農業の今とこれからについて、政策的な視点および現場的な視点から幅広く議論するべく、フランスと日本・北海道のそれぞれにて最前線に立つ農業関係パネリストによる公開討論会を開催し、研究者、農業者、市民、学生を含む155名が参加しました。

フランスからは、農村環境の様々な変化等を中心に40カ国以上での研究経験を持つ農学者エティエンヌ・アンズラン氏と、国土総局にて持続可能な農業の実践を指揮されるエリック・ジリ氏をパネリストとしてお招きし、日本からは、電気柵等による革新的な放牧システムをはじめとするニュージーランドのローコスト・ファームイングの導入に長年取り組まれるファームエイジ株式会社 小谷栄二代表取締役と、現役の畑作農家である北海道十勝地区農協青年部協議会 前多幹夫副会長に加え、農学研究院の久田徳二客員教授、北方生物圏フィールド科学センターの三谷朋弘学術研究員がパネリストとして参加しました。農学研究院 林美香子客員教授による司会進行と、同 内田義崇助教によるファシリテーションのもとパネルディスカッションが開始されました。

討論では、それぞれのスピーチを受けて、エコロジー農業の定義について、単独の農業技術ではなく農業生産に関する考え方の変化自体であることや、エコロジー農業を普及していくために必要な政策や消費者の理解などについて議論がなされました。

テーマとしては大きく以下の3つに分けて議論を行いました。1) 日本とフランスにおける農業とエコロジー、2) 新たな取り組み事例、3) 有効な公共政策。

テーマ1ではエコロジー農業の定義について、単独の農業技術ではなく農業生産に関する考え方の変化自体であること等が議論されました。テーマ2では、エコロジー農業の取り組みの実態や日本における糞尿の有効利用などについて議論されました。テーマ3では、個々の農家や農家グループが、利用することの出来る政策や(フランス側)や消費者教育等についての議論がなされました。

最後の質疑応答では、時間一杯まで多くの質問が会場中から行なわれ、また、終了後においても来場者が個人的な質問をパネリストに直接行なっている様子がしばらく見受けられました。

スケジュール

ウェルカム・リマーク: 北海道大学農学研究院教授(本討論会企画担代表) 大崎 満

オープニング・リマーク: フランス大使館経済部農務副参事官 ニコラ・ベルトレ

イントロダクション: 北海道大学農学研究院 客員教授 林美香子

パネリストスピーチ (5分/人)

・フランス農業・農産加工業・林業省農業・農産加工業政策・国土総局

農産加工業戦略・持続可能開発部門長

エリック・ジリ

・オタワ大学 社会科学部 国際開発・グローバルスタディーズ大学院(研究科)客員教授

農業開発研究国際協力センター(CIRAD) 理事長顧問

エティエンヌ・アンズラン

・株式会社ファームエイジ代表取締役 小谷栄二

・北海道十勝地区農協青年部協議会 副会長 前多 幹夫

・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター研究員 三谷 朋弘

討論

- ・ファシリテーター：北海道大学農学研究院 助教 内田義崇
- ・進行サポート：林美香子氏

会場からの質疑応答

クロージング・リマーク：内田義崇



質疑応答の様子



参加者の集合写真

行事内容

開催日時	12月19日(金) 開始:13:00 終了:17:15 (終了時間が変更になりました) (終了しました)
主催者	RJE3 コンソーシアム国際運営委員会セントラル・オフィス
共催	北海道大学
後援	北海道、札幌市、札幌市教育委員会
会場	フロンティア応用科学研究棟
言語	日本語・ロシア語(同時通訳あり)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する人材を育成すべく、数十年の共同研究実績を有する北海道大学とロシアの大学が協力して教育プログラムを開発します。環境評価、文化的多様性、土壌と生産、地域資源開発、防災管理に係る文理融合プログラムについて議論します。

RJE3シンポジウム

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク 2014

大学の世界展開力強化事業
RJE3シンポジウム

ARCTIC OCEAN

Laptev Sea

East Siberian Sea

日露共同で行なう教育プログラム開発プログラム

樺東・北樺圏における 持続的発展を未来へつなく

RJE3とは?

経済・社会関係分野として、本学とロシアの大学において提携した地域、研究員会、商社・官公庁・文芸界のフィールド共同研究拠点およびネットワークに基づき、樺東ロシアの各都市と大学との交流が中心となる。北海道やロシアの両国から、産業界の代表者などで構成される日露協同推進コンソーシアム "Joint Russo-Japan Report Advancing Consortium"（以下「JRJCコンソーシアム」）を組織し、産学・企業間の連携を促進する。文化・観光も牽引する専門委員会を設置して4年経ちです。

RUSSIA

樺東・北樺圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する人材を育成すべく、数十年の共同研究実績を有する北海道大学とロシアの大学が協力して教育プログラムを開発します。本セッションでは、基礎研究、文化的多様性、土壌と生態、地質資源開発、防災管理に係る文理融合プログラムについて議論します。

特にこれまで日本の実況に異なっていた様々な立場の方に意見をいただき、これまでの日露実況の状況、当該教育プログラムから今後の国際貢献に期待できることなどを議論いたします。また、「ナノメディスカッション第二部」では、学生との質疑応答に参加していただき、将来のよりよい関係についてビジョンを共有します。

開催日：2014年**12月19日(金)**
13:00~17:15 (開場/11:30)

会場：北海道大学フロンティア応用科学研究棟
レクチャーホール

参加申し込みはウェブサイトから行えます。締切りは**12月18日(木)まで**です。

事前に参加人数を把握するため、

できるだけこちらからお申込みいただければと思いますが、
遠方直接会場にお越しいただいても結構です

QRコードを読み取る

●主催：北海道大学 ●後援：北海道大学運営委員会、札幌市、札幌市教育委員会

プログラム

■ ご挨拶
13:00

北海道大学校長
山口 佳三



■ 基調講演 1
13:05-13:35

「ロシア・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を導く」
専門教育プログラム
(East Russia-Japan Expert Education Program (RJE3 program))
北海道大学副学長・RJE3プログラム事務推進責任者
望月 恒子



■ 基調講演 2
13:40-14:10

「ロシア太平洋地域：多面的視点で見た開発、
国際共同のための地理学的・地質学的な強みと課題」
ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所長
バクラーノフ、ビョートル・ヤコヴレヴィチ



■ パネルディスカッション
14:20-17:15
途中10分の休憩あり

【第一部】 RJE3に関係するパネリスト5名が、シンポジウムテーマについて
「行政・産業界の交流の現状と未来像」「大学交流を通じて人材育成」の観点から、
各人15分程度のコメント。
【第二部】 北大に留学中(留学予定)のロシア人学生2名及びロシアに留学経験がある(留学
予定の)北大日本人学生2名による簡単な研究紹介と、パネリストとの対談。

〈司会〉 北海道大学 アイス・異文化研究センター 加藤 博文 教授

(パネリスト) 北海道庁 経済開発政策課長 加藤 健司 氏
北海道銀行 国際部ロシア室 中川 文雄 課長
札幌サハリン株式会社 クトヴォイ、アンドレイ 代表
北海道大学 工学研究院 瀬戸口 剛 教授
北海道大学 プリシヤズニ、ミハイル 副学長

岩波 直 (北海道大学大学院理学部・物理学専攻 博士修業課程2年)
岩波 真由子 (北海道大学大学院文学研究科・日本史 修士課程1年)
バンコフ、オレグ (北海道大学大学院国際広域メディア・経営学院:
国際マーケティング 研究員、サハリン国立大学出身)
ラザレフ、アニシア (北海道大学経済学研究所・経済 修士2年相当)

事前申し込み 事前申込が必要です。[こちら](#)からお申し込みください。
(申込受付期間:11月17日~12月18日)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学国際本部 サステナビリティ・ウィーク事務局

mail: RJE-3@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

今年度採択された北大の世界展開力強化事業「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム（East Russian-Japan Expert Education Program, RJE3プログラム）」関連シンポジウムが開催されました。

本シンポジウムには、RJE3プログラムのロシア連携5大学である極東連邦大学、北東連邦大学、イルクーツク国立大学、サハリン国立大学、太平洋国立大学の学長・副学長・教員等15名を含む90名が参加しました。

始めに山口佳三総長から挨拶が行なわれ、当プログラム構想責任者である望月恒子副学長、および本学と長期にわたり様々な共同研究実績を持つロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所のピョートル・バクラーノフ所長に基調講演をいただきました。望月副学長からは、RJE3プログラムで育成する人材のビジョンと体制、および本学の戦略との関係性などを含め概要についてお話いただきました。バクラーノフ所長からは「ロシア太平洋地域：長期的視点で見た開発、国際共同のための地理学的・地政学的な強みと課題」として、本プログラムが対象とする地域における様々なデータを元に、その可能性と課題についてお話いただきました。

続くパネルディスカッション第一部では、本プログラムのコンセプトにご賛同いただいている日露の学術、産業、経済各界を代表する方々（北海道庁経済部経営支援局国際経済室 小玉俊宏室長、北海道銀行国際部ロシア室 中川文敏調査役、在北海道サハリン州政府代表部 クトヴォイ・アンドレイ代表、北東連邦大学 プリシヤズニ・ミハイル副学長、北海道大学工学研究院瀬戸口剛教授）にご登壇いただき、各人の経歴等とともにプログラムに対する期待や可能性についてお話いただきました。

パネルディスカッション第二部では、RJE3に関連した研究を行う日露の学生（理学院博士二年：動物考古学専攻 岩波連さん、文学研究科修士一年：日本史専攻 岩渕真由子さん、国際広報メディア研究生：サハリン国立大学出身：医療ツーリズム専攻 オレグ・パンコフさん、北東連邦大学経済学研究科修士二年相当：経済学専攻 アニシア・ラザレワさん）による自己紹介の後、パネラー全員でディスカッションを行いました。育成される人材に求められること、これまでの交流と今後の展望、また学生の立場からの質問や希望等について、会場も巻き込みつつ活発な議論が行われました。

次回本学にて実施される2015年3月の基礎科目（試行）に向けて、関係者一同既に準備を進めているところです。



参加者集合写真



山口総長による開催挨拶

先住民文化遺産とツーリズム ―文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題―



行事内容

開催日時	2014年12月20日(土)～2014年12月21日(日) (終了しました)
主催者	アイヌ・先住民研究センター
共催	観光学高等研究センター
後援	WAC-Japan(世界考古学会議京都大会実行委員会)
会場	学術交流会館 小講堂
言語	日本語・英語 (逐次通訳)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要 人間の営みは、その生活する環境に大きな影響を及ぼしてきました。現在、私たちを取りまく景観にも、そこに生きた人々の様々な関与の痕跡が残されています。本シンポジウムでは、持続可能な資源管理の側面から近年注目を集めている先住民社会における景観利用について、スウェーデン、アメリカ北西海岸、旭川、平取、白老の事例を参照しながら広く議論します。また、先住民文化遺産の特質と、その保護・管理方法のあり方、そして地域資源として活かす可能性について検討します。

[シンポジウムのポスターはこちらです](#)

プログラム

12月20日(土) 13:00～17:00 (開場12:30)

「岩と水が創り出す文化的景観」

ニール・プライス (ウプサラ大学考古学部・教授、スウェーデン) カール＝ゴスタ・オジャラ (ウプサラ大学考古学部・講師、スウェーデン) 友田哲弘 (旭川市教育委員会社会教育部・主査／旭川市博物館・学芸員) 吉原秀喜 (平取町役場アイヌ施策推進課・主幹)

12月21日(日) 10:00～16:00 (開場 9:30)

「海と湖が創り出す文化的景観」

スヴェン・ハーカンソン (ワシントン大学バーク博物館人類学部・准教授、アメリカ) リック・ネヒト (アバディーン大学考古学部・上級講師、イギリス) 八幡巴絵 (アイヌ民族博物館・学芸員)

会場はこちら



北海道大学側の実施責任者 アイヌ・先住民センター教授 加藤 博文

事前申し込み 不要 (直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

問い合わせ先 アイヌ・先住民研究センター

岡田真弓

E-mail: m-okada[at]let.hokudai.ac.jp

実施報告

本シンポジウムは、「先住民文化遺産とツーリズム」というテーマで2012年から実施している国際シンポジウムの1つです。今年の副題は、「文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題」でした。

シンポジウムでは、持続可能な資源管理の側面から近年注目を集めている先住民社会における景観利用について、スウェーデン、アメリカ北西海岸、平取、旭川、白老の事例を参照しながら広く議論しました。また、先住民文化遺産の特質と、その保護・管理方法のあり方、そして地域資源として活かす可能性について、観光や地域おこしの側面からも検討を行いました。

講演者として、国内外において先住民族の文化的景観もしくは先住民族の考古学に携わる大学の研究者、博物館業務従事者、埋蔵文化財行政従事者の方々にご登壇いただきました。

スウェーデンのウプサラ大学の2名の研究者は、サーミと考古学あるいは考古学遺跡から読み取れる先住民の景観利用について講演されました。また、ワシントン大学バーク博物館およびアバディーン大学からの報告者には、アメリカ北西海岸で出土したネイティブ・アメリカンに関する考古学遺物などを活かした博物館活動についてご報告いただきました。

北海道の事例として、旭川市と平取町の埋蔵文化財行政従事者にご登壇いただき、地域内にあるアイヌ文化に関わる資源をどのように再発見し、継承していくかについてご発表いただきました。白老町のアイヌ民族博物館の学芸員の方からは、白老の景観にまつわる口承伝承をご紹介いただくとともに、自然と深く関わりを持ちながら発展してきたアイヌ文化の継承に関する博物館の取り組みをご報告いただきました。最後には、講演者全員によるパネルディスカッションが行われ、アイヌや先住民の文化遺産を特徴づける景観や自然利用を、まさに現代および未来の課題として考えることの重要性が確認されました。



プライス教授による講演の様子



文化的景観をめぐる総合討論の様子